

A stylized map of East Asia, including Japan, Korea, and parts of China, rendered in a light blue color against a white background. The map is positioned in the upper right quadrant of the page.

日韓、東アジアが
ともに生きるために

2016年度

第11回日韓大学生国際交流セミナー報告書

主催 お茶の水女子大学グローバル文化学環
お茶の水女子大学グローバル教育センター
同徳女子大学校外国語学部日本語科



日韓民族衣装体験（8月3日 お茶の水女子大学）



第2次発表会（8月6日 草津セミナーハウス）



第2次発表会（8月6日 草津セミナーハウス）



送別会（8月7日 草津セミナーハウス）

目次

第 11 回日韓大学生国際交流セミナー概要	1
森山新 (お茶の水女子大学)	
講演	
日韓、東アジアがともに生きるために	5
森山新 (お茶の水女子大学)	
グループ発表	
1. 新大久保における日韓共生	6
2. 歴史認識の差異を乗り越えるために	9
3. 韓日の未来と文化	12
4. 交流の促進から日韓交流へ	15
5. 東アジアにおける女性福祉向上のために	18
個人レポート	
個人レポート	21
総評	
直接交流から始まる共生	65
朴恵仁 (お茶の水女子大学)	
総評	66
金囁泳 (同徳女子大学校)	
ともに生きるために	67
森山新 (お茶の水女子大学)	
編集後記	68

第 11 回日韓大学生国際交流セミナー

学生代表

お茶の水女子大学

生活科学部人間生活学科 宮島葵

文教育学部グローバル文化学環 松尾明莉

文教育学部グローバル文化学環 山田美奈

同徳女子大学校

経営学科 李ソミ

日本語学科 鄭恵林

日本語学科 趙善恵

日時 2016年8月2日～8日

場所 お茶の水女子大学

代々木青少年オリンピックセンター

草津セミナーハウス

主催 お茶の水女子大学グローバル文化学環・グローバル教育センター

同徳女子大学校日本語科

今回が第11回となる日韓大学生国際交流セミナーは、韓国の協定校である同徳女子大学校から20名の学生と1名の教員(金)の計21名を派遣、お茶の水女子大学からは、24名の学生(内1名は同徳女子大学からの交換留学生)、1名のTA(朴)、1名の教員(森山)が参加し、実施された。昨年、戦後70年、日韓国交回復50周年を迎え、第10回日韓大学生国際交流セミナーでは、過去を見つめ、これからの日韓関係の未来に向けて提言を行った。今回のセミナーでは、「共に生きる」という言葉をテーマに、日韓さらには東アジア共同体の形成に向けて、発表および討論を行った。昨年に続き、日本側は韓国語で韓国側は日本語で発表を行い、両国学生が言語・文化の壁を越えて、グローバルな視点に立ち、日韓の間に存在する問題を見つめ、未来に向け共生するための一歩となる熱い議論を交わした。

今回のセミナーでは、新たに学生代表を日韓双方で3名ずつ設け、学生主導のセミナーという色がさらに濃くなった。またTV会議システムとFacebook、LINEなどを導入し、5月から事前の遠隔交流が行われた。1週間という期間の中で日韓の絆を深め、第11回日韓大学生国際交流セミナーは、大成功のうちに幕を閉じた。

1. 日程表

8月2日(火)	歓迎会 (代々木青少年オリンピックセンター、センター棟研修室)
代々木青少年オリンピックセンター宿泊棟に宿泊 18:30～20:30 歓迎会	
8月3日(水)	開講式・日韓文化体験 第1次発表
10:30～11:30 講演会 文教1号館第1会議室 森山新 本学 「日韓・東アジアが共に生きるために」 金囁泳 同徳女子大学校 「多文化・異文化コミュニケーション 言葉から見る日本と韓国」 11:30～12:30 伝統衣装 体験文教1号館第1会議室 14:00～16:30 第1次発表会	
8月4日(木)	野外実習
グループ別行動	
8月5日(金)	草津セミナーハウスにて合宿・グループ討論
9:00 代々木オリンピックセンターを出発、草津へ 14:00 草津セミナーハウスに到着 19:00～21:00 グループ討論	
8月6日(土)	第2次発表会
9:00～ 発表準備 14:00～17:00 第2次発表	
8月7日(日)	自由行動・送別会
～18:00 自由行動 19:00～21:00 送別会	
8月8日(月)	川越散策・解散
9:00 川越に向けて出発 13:00～14:30 川越散策 16:00 東京解散	

2. 参加者

2.1 お茶の水女子大学学生 (24名)

班	氏名	学部	学科・コース	学年
1	高橋 優	文教育学部	グローバル文化学環	2年
	池田 恵子	文教育学部	グローバル文化学環	3年
	鈴木 結奈	文教育学部	人文科学科	2年
	高橋 佐和	文教育学部	グローバル文化学環	4年

2	花岡 瑞月	文教育学部	グローバル文化学環	2年
	小川 諒子	文教育学部	グローバル文化学環	2年
	高田 実穂	文教育学部	グローバル文化学環	2年
	高坂 千尋	文教育学部	言語文化学科	1年
3	音花 沙也佳	文教育学部	グローバル文化学環	2年
	清水 まどか	文教育学部	グローバル文化学環	2年
	浅尾 理沙子	文教育学部	人文科学科	1年
	有井 志帆	文教育学部	グローバル文化学環	3年
4	佐々木 沙耶	文教育学部	グローバル文化学環	4年
	岩澤 ひかる	文教育学部	言語文化学科	1年
	三村 友理	文教育学部	グローバル文化学環	2年
	水澤 有奈	文教育学部	グローバル文化学環	2年
5	田村 向日葵	文教育学部	グローバル文化学環	2年
	吉川 絢子	文教育学部	グローバル文化学環	2年
	山本 実穂	文教育学部	グローバル文化学環	2年
	松田 美柚乃	文教育学部	言語文化学科	2年
	尹 惠鈴	文教育学部	人文科学科 (交換留学生)	2年
実行委員	山田 美奈	文教育学部	グローバル文化学環	2年
実行委員	松尾 明莉	文教育学部	グローバル文化学環	3年
実行委員	宮島 葵	生活科学部	人間生活学科	4年

2.2 同徳女子大学校学生

班	名 前	学科・学年
1	김희주 (金熹住, キム・ヒジュ)	日本語学科 4年
	어다연 (魚多沅, オ・ダヨン)	日本語学科 3年
	장하영 (張荷榮, チャン・ハヨン)	日本語学科 3年
	신나래 (辛ナレ, シン・ナレ)	日本語学科 4年
2	최유지 (崔有池, チェ・ユジ)	日本語学科 4年
	이윤경 (李侖璟, イ・ユンギョン)	日本語学科 3年
	정혜원 (鄭蕙源, チョン・ヘウォン)	放送芸能学科 5年
	배주희 (裴珠希, ベ・ジュヒ)	日本語学科 3年
3	정가은 (鄭佳珉, チョン・ガウン)	日本語学科 3年
	백혜림 (白惠琳, ベック・ヘリム)	日本語学科 3年
	장선혜 (張善慧, チャン・ソンヘ)	日本語学科 5年
4	조연주 (趙娟珠, チョ・ヨンジュ)	日本語学科 1年
	이수민 (李樹旻, イ・スミン)	日本語学科 3年
	이희진 (李熙眞, イ・ヒジン)	日本語学科 3年

5	윤동희 (尹東熙, ユン・ドンヒ)	経営学科 2年
	서수진 (徐秀眞, ソ・スジン)	日本語学科 3年
	전민정 (全珉政, チョン・ミンジョン)	日本語学科 3年
実行委員	이소미 (李ソミ, イ・ソミ)	経営学科 3年
実行委員	정혜림 (鄭惠林, チョン・ヘリム)	日本語学科 2年
実行委員	조선희 (趙善惠, チョ・ソネ)	日本語学科 1年

2.3 スタッフ

大 学	名 前	所 属	役 職
お茶の水女子大学	森山 新	グローバル文化学環	教員
お茶の水女子大学	朴 恵仁	大学院人間文化創成科学研究科	院生
同徳女子大学校	金 喆泳	日本語学科	教員

日韓、東アジアがともに生きるために

森山新（お茶の水女子大学）

2015年は戦後70年、日韓国交回復50年の年であった。しかしながら東アジアでは国家間の関係は依然良好とはいえず、政治による解決の糸口は一向に見えない状況にある。そうした中、我々は教育者、学生としてできることを模索し、3つの教育実践を行った。

第一はTV会議システムを用いた日中韓の対話授業である。中国の大連理工大、韓国の釜山外大と、戦後70年をテーマに政治的タブーをあえて取り上げ、討論を行った。大連理工大とは、歴史教育、日中のイメージ、ステレオタイプ、マスコミ報道、異文化理解などをテーマに、一方、釜山外大とは、戦後処理・賠償問題、領土問題、慰安婦問題、日本の首相の戦後談話をテーマに、忌憚ない討論を行った。実施前には様々な不安もあったが、終わってみると両国の学生から、このような場をいつか持ちたかった、一番よい授業だったなどといった非常に肯定的な反応を得ることができた。

第二は、この日韓大学生国際交流セミナーで、昨年（2014年）の第10回セミナーでは、両国の学生が歴史、反日・嫌韓、日韓交流、戦後70年談話など、常に対立の絶えないテーマを扱い、両国の学生が共同声明を発表した。また「女性の社会進出」という両国が共通して持っている課題にも取り組み、共同声明を行った。

第三は、第5回国際学生フォーラムである。外務省委託の日韓文化交流基金の事業に採択され、同徳、お茶大など日韓150名の学生が、両国の過去を見つめ、互いの良き点を尊敬し合い、そしてともに歩むパートナーとしての第一歩を踏み出す討論の場を持った。

では、東アジアの対立の原因は一体何であろうか。何よりも東アジアの場合にはヨーロッパとは異なり、歴史を直視し、このようなことを二度と繰り返さないといった深い反省が欠如していた。これは特に日本の問題であるが、もう一つの原因として国民教育を挙げることができる。国民教育は近代国家成立とともに世界に広まったもので、国家がその維持・発展のために、国民に必要な資質、能力を育成させると同時に、国に対するナショナル・アイデンティティを築くものでもある。国語はナショナル・アイデンティティ育成に何よりも直結し、地理では世界地図を見ながら自国が小さくとも世界の中心であるというイメージを刷り込まれる。歴史では自国中心の歴史観により、国民が共有すべき歴史認識を植え付ける。文化では、優れた作品、遺産の存在を通じ、自国の優秀性や自尊心が育まれる。さらに国歌斉唱や国旗掲揚を通じ、国家に対する忠誠心が育まれる。これらは決して悪いものと言い切ることはできないが、グローバル時代を迎え、国家間の関係が緊密になると、国民教育による国家間の認識の差が対立の原因となりうるのである。従ってグローバル時代に日本と韓国、そして東アジアがともに生きるためには、ナショナル・アイデンティティを超え、東アジアという、インターナショナルなアイデンティティを築くための、新たなシティズンシップ教育が求められるのである。

欧州統合の教育政策に深く関わってきたパイラムは、外国語教育は国民教育により自国中心となってしまった我々の視点や価値観をクリティカルに見つめ直すきっかけを与えてくれたとした。またグローバル時代に求められるシティズンシップを育むためには、言語や文化だけでなく、政治をも扱うことの重要性を語っている。我々のこのセミナーも両国の間に立ちはだかつてきた様々な政治、歴史の問題を取り上げ、両国の学生が「ともに生きる」を目標に、毎年熱い討論を展開してきた。戦後70年の歴史を乗り越えんとした昨年セミナーの成功を基盤に、第11回を数える今年（2015年）は、さらに東アジアアイデンティティの構築と、東アジア共同体建設のために、学生たち自らが先頭に立って成功体験を積むことで、東アジアがともに生きる第一歩を踏み出す場となってもらいたいと考えている。

新大久保における日韓共生

1 班（都市共生）

1. 第 1 次発表

1.1 日本側

今回日本側は日本最大のコリアンタウン新大久保における日韓共生について、文献調査および新大久保で 22 年店を構えている「オムニ食堂」でインタビュー調査をした。調査項目は、新大久保の人々の職業、居住状態、在日韓国人とその子どもの教育環境、住民の抱える問題の 4 つである。

まず新大久保の人々の職業については、年代別におもに 3 つの区分に分けられる。1950 年から 1980 年代にかけては、工場などでの出稼ぎ労働、1980 年代から 2000 年頃は労働者に加え、韓国人を対象とした商店の経営、2000 年代から現在は、観光化の流れを受けて韓国人を対象とした商店の経営、日本の観光客向けの商店の経営が主な職業であった。居住状態に関しては、新宿区百人町は現在新宿区内において最も外国人の居住者が多い地域で、韓国人向けの店舗が多い職安通りがある。2000 年代の韓流ブームを受け韓国から出店した店舗も多いが、競争が激しく店舗の流動も激しいため、長期的に居住することが困難である。教育環境については、東京韓国学校という韓国の民族教育が受けられる学校も存在しているが、その子どもの親の考えによって日本の学校を選ぶか韓国の学校を選ぶかは、様々である。住民の抱える問題について、生活環境の悪化とコミュニティ形成の問題があげられる。生活環境の悪化に関しては、観光地化した新大久保では、交通状況の悪化、騒音、商品陳列や看板掲載、およびゴミ分別のルール違反、ヘイトスピーチの開催などの問題が生じている。コミュニティ形成については、新大久保では日本人と韓国人が長期的な強いコミュニティを形成するのは難しく、新宿区の調査では、大久保地区において、61.9%の外国人居住者が日本人住民との関係がないと回答しているほか、韓国系店舗の 3 分の 1 のみが商店会に参加しており、商店街としても協力が不十分であるといえる。

以上の調査から、新大久保においては商業的な対立もあり、日韓の友好関係を築くためのコミュニティは見られなかったが、一方で国籍を意識せずうまく地域になじんでいる在日韓国人も見られた。今後は、地域の交流の場となっている祭りをさらに盛り上げ、住民の参加を呼びかけるなど無理のない持続的なコミュニティの形成を目指していくべきだと考える。

1.2 韓国側

1 班の韓国側は、東部二村洞に住んでいる日本人と彼らの生活環境について調査した。東部二村洞は韓国の行政区域の中で最も古い外国人街の 1 つであり、日本人の居住者が多いことからリトル東京と呼ばれている。また、この街は日本による植民地化政策が動き始めた頃から人が集まり始めて発展し、1965 年の日韓国交正常化の後にジャパニーズタウンとして誕生した経緯を持っている。以下にいくつかの項目に分けて東部二村洞について調べたことを述べてゆく。

ソウルの統計によると 2015 年末の時点で龍山区に住んでいる日本人は約 1700 名で、そのうち約 1400 名の日本人が東部二村洞に住んでいるようだ。これは東部二村洞が現在ソウル最大のジャパニーズタウンであることを示している。

また、東部二村洞に住んでいる日本人の職種を調べたところ、最も多かったのは韓国に

支社を構える日本企業に派遣された会社員だった。また、わずかだが東部二村洞で店を営んでいる人がいることもわかった。彼らは日本食品の店やパン屋を営んでおり、食品を主に扱っていた。

次に日本人の住宅環境を調査した。東部二村洞の不動産業者によると、彼らは主にマンションに住んでいることが判明した。それらはほとんどが賃貸マンションで、家賃が月 200 万ウォン近くもするソウルでも高額なマンションだった。つまり東部二村洞に住んでいる日本人はほとんどの人が経済的に豊かであるということだ。

また、東部二村洞に住む日本人の家族構成についても知りたいと思い、現地でインタビューを行った。韓国人との国際結婚をした家庭があるかどうかを探してみると、夫婦が二人とも日本人であるケースしか見られなかった。これは前述したように、東部二村洞に住んでいる日本人の場合、韓国への派遣・転勤のため家族と一緒に韓国に赴任するケースが多いからだと思われる。

さらに、彼らの子供たちは韓国でどのような生活をしているのかを知るために、学校を調査対象にして教育環境を調べた。インタビュー調査から、子供たちは皆ソウル日本人学校に通っていることが分かった。ソウル日本人学校はソウルに住む日本人の子供たちのために設立され、入学資格は日本国籍があることとされている。幼稚部、小学部、そして中学部があり、学制は日本と同様である。学校は、学生が韓国で教育課程を修了して日本に帰っても問題なく勉強を続けられるようなカリキュラムを組んでいた。さらに韓国の学校との交流会も行っていて、子供たちが韓国の文化に適應できるように手助けする役割も果たしていることが分かった。

そして東部二村洞での生活環境については、次の4つの項目を中心に調べた。

まず1つ目に日本人のコミュニティ形成の状態である。日本人は子供の教育に関する情報を共有したり趣味活動をしたりするために色々なサークルや集まりを作って活動していることが分かった。ほとんどの日本人は三年程度しか韓国に滞在しないので韓国の地域社会に参加しているという意識はないようで、日本人同士で固まりがちであった。

2つ目は日本人のためのサービスについてだ。東部二村洞には日本人のために作った色々なサービスがあった。日本人相手の商店や日本語専用の窓口がある銀行のほか、日本語が使える病院、ヘアサロン、不動産がその例である。

3つ目には、韓国人と日本人の間に何らかのトラブルが起きているかどうかを調べた。今まで東部二村洞で日本人が関わった事件は一度もないそうで、日本人が差別や犯罪とは縁遠く、韓国人と日本人の間には問題が起きていないということを証明する結果だった。

最後に、東部二村洞で開催される多文化行事について調べた。ここでは韓国舞踊、サムルノリ、テコンド、韓日料理体験など両国の文化を体験できるプログラムが実施されていた。またグローバルビレッジセンター主催の文化体験プログラムでは韓国の伝統料理と工芸を体験することができ、外国人参加型のフリーマーケットで東部二村洞の住民と外国人との触れ合いの場を生み出そうとしていた。

2. 第2次発表

第1次発表で日本側はコリアンタウン「新大久保」を、韓国側はジャパニーズタウン「東部二村洞」をフィールドとしてインタビュー調査を行い、それぞれの街について調べたことを発表した。その結果、新大久保は商業目的の、東部二村洞は居住目的の街として機能しており、性質が全く異なることが分かった。さらに最近では日韓の間で大きなトラブルは見られないということはどちらの街でも共通していたが、それは親交が深まったからというよりは関わりを避け生活空間を分けているからであると言えた。

今回バディ同士で2人1組のチームを作り、新大久保のコリアンタウンにて一組につき

1～2人の住民にインタビューを行った。

まず新大久保の不動産会社（匿名希望により店名は明記しない）で新大久保での日韓人の共生に伴うトラブルについて訊ねた。そこで新大久保での日本人と韓国人の間のトラブルには騒音・ごみ・料理の臭いなどがあり、外国人同士がそれぞれコミュニティを作って部屋を溜り場にしてしまう等の苦情も多いという事が話を聞いて分かった。さらに韓流ブームの頃から新大久保に韓国人の居住者が増え、上のようなトラブルも増加した事から、外国人は入居できないマンションやアパートが増えている事も判明した。

次に韓国料理店オーナー40代韓国人女性と焼肉料理店アルバイト店員の26歳男性に話を聞いた。日本で生活していて不便なことはあるか訊ねると、韓国語訳された情報が日本には少なく難しい漢字に苦労しているというほとんど同じ答えが得られた。

最後に新大久保の歌舞伎町薬局の店員である日本人の男女に話を聞いた。いろいろな国の人が集まる新大久保に対する思いを訊ねたところ、「互いに拒絶せず理解しようと努めるべきだ」という答えが返ってきた。

日本側の第1次発表を含め2度にわたる新大久保でのインタビューの結果、同じ韓国人でも日本に住んでいる期間が長い程日本の文化慣習に慣れ「日本人化」してゆく傾向が見られた。日本に長く住んでいる外国人よりも日本に来たばかりの外国人がトラブルを起こしやすいのだが、次の3つの問題を改善すればよりよく共生できると考えた。3つの問題とは難解な日本語を外国人が理解できないという言葉の壁の問題、日本人と外国人のコミュニティがないという問題、そして日本人が外国人との関わりや対話を避けようとする態度の問題のことである。

以上の内容を踏まえ、日韓両国の学生から見た日本人と韓国人の理想の共生のかたちを話し合った。話し合う中で韓国の日韓共生の取り組みの実態を調べたり、日本と韓国の政策の違いを知ったりと新たな知識を共有する時間を取ることが出来た。全員で話し合った結果得られた結論は以下のとおりである。

- ① 「日本人」や「外国人」という概念がなくなり、人種や国籍を気にすることなく個人として協力し合う社会をつくる
- ② 日本人が外国人を住民として認識するだけでなく、外国人も日本の住民であるという意識と責任感を持って生活する
- ③ 仕事・大学進学などで一時的に日本・韓国に住んでいる人々にとって「どうせ限られた期間しか住まないから」という意識があるのは仕方のないことだが、住んである間は同じ地域の仲間であるという意識を広める
- ④ 「うまく共生する事＝問題が起きない事」ではなく、交流することで問題に向き合い、取り組み、解決していく社会が理想である

今後日韓がよりよく共生していくためには、民族の違いを乗り越えて同じ東アジアの仲間としての意識を作り上げてゆくことが不可欠である。私達大学生がまずは交流を深めてゆくことでその足掛けとしていきたい。以上が私たちの班で話し合っ出て出した結論である。

参考文献

平成27年度新宿区多文化共生実態調査報告書

松井吉寛、内藤めぐみ、海野菜里、小坂将悟、戸高夏美「新大久保コリアンタウンにおけるクラスター分析」

外国人集住都市会議「はままつ2015」－多文化共生社会の実現に向けて

歴史認識の差異を乗り越えるために

2班（歴史認識）

1. 第1次発表

1.1 日本側

「日韓の共生のための歴史認識および歴史教育」をテーマとして設定した私たちのグループでは、日本・韓国それぞれでお互いに対するイメージや日韓の歴史上重要な人物・出来事に対する認識、今後の日韓関係の在り方などについて幅広い世代を対象にアンケート調査を実施し、その結果をもとに第1次発表を行った。「日韓の共生」という未来に向けてアクションを起こすためにはまず過去を見つめ直し、そこから今後の道を模索するためのヒントを得ることも有効な手段であると考えたこと、そして歴史認識において対立が目立っている印象がある日韓関係に対し、その認識の形成に影響を与えるであろう「歴史教育」を切り口に改善策を導き出す必要があると考えたことが、このテーマ設定の主な動機だ。

事前に行ったアンケートの結果からは、世代に関係なく、歴史に対する知識の浅さや関心の薄さが見てとれる回答が目立っていた。その傾向が特に顕著に表れたのは、韓国の中では日韓の歴史上非常に重要な出来事であったとみなされている閔妃暗殺事件や、現在でも大きな課題として残されている慰安婦問題に関する問いであり、「よく知らない」と回答した人数は半数を超えていた。また、韓国併合時の皇民化教育について何を知っているか、という問いに対しても、閔妃暗殺事件などと比べると知っている人の割合は高いものの、「創氏改名」や「日本語の強制」といった教科書で習うような表面的な回答のみが返ってくる結果となった。このような認識の在り方の一方で、日韓関係が悪化した原因は歴史認識のズレにあるという意見も多く、今後の展望として、日韓の関係が改善されることを望む声も非常に多くあがっていた。

この結果は、両国の歴史をめぐる問題が解決されれば共生の道が開ける可能性があるのにもかかわらず、歴史に関してあまり知識がないため相手の立場への理解はおろか自分自身の意見も持つことができていない、そしてそれを詳しく知ろうともしないという矛盾した姿勢を示していると言えよう。だからこそ、歴史認識のズレを埋められるような歴史教育の在り方を求めていくことは、日韓関係改善、そして両国の共生に向けた効果的な手段となり得るのではないだろうか。歴史認識のズレが関係悪化を招いているという考え、そして今後の日韓の共生を望む声が民間レベルで広まっている現状から考えると、「日韓の共生のための歴史教育」の実現は現実的な方策であると言えるだろう。現行の歴史教育の在り方を変え、日韓関係改善の一助となるような教育の姿が今後求められていくべきだということが、私たちの導いた第1次発表での結論である。

1.2 韓国側

私たちの班は第1次発表のテーマを「韓日両国の歴史認識とその問題」に設定し、韓日のお互いに対するイメージを調べるため、それぞれの国でアンケート調査を行った。アンケートの内容は「日本に対するイメージ」、「日本帝国統治時代の、日本帝国による皇民化政策」、「韓国の慰安婦問題」、「明成皇后殺害事件」、「安重根義士に対する評価」、「伊藤博文に対する評価」、「在日韓国人に対するイメージ」、「韓日対立の原因」、「日本政府の韓国に対する謝罪が十分か否か」、「今後の韓日関係について望むこと」であり、様々な年代を対象にアンケートを取った。

皇民化政策について20代の回答者からは分からないと答えた人や、皇民化政策に関連のない事柄を述べた人がいた。安重根義士と伊藤博文への評価に関しては、全ての世代が同じく安重根義士を高く評価した反面、伊藤博文に対する評価は世代によって異なった。例えば20代は回答者の50%が伊藤博文を低く評価したが、他の世代は高く評価したり、よく分からないと答えたりと回答にばらつきが見られた。日本政府の韓国に対する謝罪に対しては、ほとんどの人が不十分としており、真心と誠意のある謝罪が必要だという意見が主流だった。今後の韓日関係については、大半が友好的関係となって協力しなければならないと答えた。韓日の歴史には未だに問題が存在し、そのような残された課題は当然解決されなければならない。そのような状態ではあるが、20～30代の若者は今後の韓日関係がそれらに縛られ更に悪化し続けることは望んでいないのだ。このようにアンケート調査を通じて様々な年齢層の意見を聞くことができた。

安重根と伊藤博文に対する内容も第1次発表で取り上げた。以前、韓国の有名な女性芸能人が、とある放送番組で安重根義士に対する歴史的な知識をあまり述べられなかった、という出来事があり、彼女は韓国国民から非常に強く非難された。それほど安重根義士は韓国人から高く評価される人物であるのだ。しかし日本人からはテロリストと認識されている場合が多いため、今回のセミナーの事前調査では安重根義士についても調査した。

今回のセミナーを通じて韓日2国での歴史認識が異なることを感じ、今後は共同歴史教科書の執筆を通じてこの問題を解決しなければならないと思った。

2. 第2次発表

第1次発表と野外実習で学んだことを踏まえ、日韓、そして東アジア諸国が共生する未来へ向けての話し合いをし、第2次発表を行った。

まずは日韓両国の教科書を比較した。焦点を当てたのは、慰安婦問題と朝鮮人の強制連行である。この2つの出来事に対しての日韓双方の主張が食い違っており、賠償や謝罪に関する問題も未だに多く残っているからだ。教科書を比較して分かったことは、どちらの問題に関しても日本の教科書より韓国の教科書の方が大きく扱われていること、韓国の教科書の記述の方が強い表現が用いられていることであった。例えば、日本の教科書では慰安婦問題についての記述は注釈として記載されているだけであるが、韓国の教科書では本文として扱われていた。更にコラムとして、戦後の慰安婦の生活や日本の謝罪についても述べられていた。日本の教科書にはそういった内容はなかった。また、強制連行に関する部分では、韓国の教科書は物的収奪とともに人的収奪があったことを「強制」「収奪」といった強い表現を用いながら強調する書き方がなされていた。一方日本の教科書は、物的搾取については直接触れられておらず、日本の労働力や物資の不足を強調する書き方であった。

これまでに学んだことから課題として浮かび上がってきたことは、歴史の認識が自国の利益に基づいたものとなってしまっていること、他国の文化や考え方に無関心であることであった。互いの立場や考え方という背景を理解せずに表面的な知識だけを取り入れることで、世間の考えに影響され、偏った意見を鵜呑みにしてしまう。こうしたことから日韓の対立が生じているのではないかと考えた。

そこで私たちは、東アジア諸国が「東アジアの国の1つである」と思うことのできるような教育の必要性を提案した。具体的な方法として、東アジア共通の教科書を作成することを中心に据えた。この教科書の目的は、「東アジア」という広い視点で歴史を学ぶことである。他国の考え方や認識の仕方を学び、自国のものと比較することを通じて、重構造的なアイデンティティの形成を目指す。ここでいう重構造的なアイデンティティの形成とは、「日本人であり東アジア人」、「韓国人であり東アジア人」のように、自分の国に加えて、

東アジアに帰属するというアイデンティティも持てるようにすることを意味する。共通教科書の作成にあわせて行いたいことも3つ提案した。1つ目は、東アジアの出版社を作ることである。どこかの国の会社が教科書を出版してしまえば、教科書が結局その国の利益に基づいたものになってしまうと考えた。2つ目は、教師の知識を増やすことだ。生徒が深く学べるようにするためには、教師陣が深い知識を持つことが不可欠である。各国の教師陣が集まり、自分の考え方や認識を共有、比較できるような場を設けたいと考えた。3つ目は、もう教科書を使う機会のない社会人に対する教育である。社会人に対しては、メディアを通じて教育を行なうことを提案した。例えば、コマーシャル、雑誌、新聞、ドラマ、書籍などの作成だ。目に触れやすいもの、手に取りやすいものを作り、社会人の意識を変えることも必要であると考えた。

共通の教科書を使っても各国の認識をそろえることなど不可能だ、という考えもあるだろう。たしかに、「東アジア」というアイデンティティを持っても自国の立場を捨て去ることは難しいだろうという意見は、話し合いの中でも出てきた。しかしその上で共通教科書の作成を提案したのは、意見の一致へ向けて努力する姿勢を持つことが重要であると考えたからである。共通教科書で勉強することを通じて、互いの国の認識を理解し、相違点を受け入れる。そしてその上で、合意へ向けてどうすべきかを一人一人が考える。この過程こそが、共生への近道ではないだろうか。歴史認識、歴史教育を変えることで東アジア諸国が共生に向かえると、私たちは信じている。

韓日の未来と文化

3 班（間接的日韓交流）

1. 第 1 次発表

1.1 日本側

私たちは文化から日本と韓国の共生を考えたいと思います。共生のためには相互理解が必要ですが、過去の認識を変えたり歩み寄せたりするのは時間もかかるし難しいことです。まずは、今現在の文化が比較的相互理解のきっかけになりやすいのではないのでしょうか。特に現時点でも、若者の間では韓流として流行の向きもあり、既に肯定的感情を持つ人が少なくないであろうとの期待もあります。①実際に、韓国文化は日本の人々にどれほど受け入れられ浸透しているのか。②文化を「相互理解」ひいては「共生」につなげるには何をすべきか。この 2 点を調べるために若い世代（主に女子大生）を中心に好きな（共感できる）または嫌いな（共感出来ない）韓国文化についてアンケートをとりました。アンケートは主に SNS を通じて行い、192 人からの回答を得、このうち 89% が 11～20 歳、84% が女性でした。主な結果をまとめていきます。「韓国文化についてどう思いますか」という質問に関しては肯定的という回答が 52%、否定的という回答が 6%、無関心という回答が 42% でした。また、韓国から日本に輸入されてきた主な文化（音楽／化粧品／ドラマ、俳優／ファッション／料理）についての質問ではまず、料理に対する回答としては好きという回答が 78%、わからないという回答が 17%、嫌いという回答が 5% でした。しかし料理以外の文化に関する回答では、わからないという回答が 60%～70%、好きという回答が 20%～30%、嫌いという回答は 10% でした。ここから読み取れることの一つは韓国に対して無関心な人がかなりいたことです。女子大生の層で「わからない」という回答が多かったのは、一つのポイントだと言えます。そこで無関心層を肯定派に変えることができれば関心がむき、日韓の相互理解につながるのではないかと考えます。「好きになること」と「知ること」は相互作用です。韓国文化を好きになると、自然と言葉や文化がはいってくるからです。言葉や文化を少しずつ知っていくことで、また更に違う分野の肯定、共感できる部分が見つかったり広がったりします。アンケートから読み取れる二つ目のポイントに、韓国文化でも料理は一般的に人気だが、他の分野ではよく知っている人は好きだけど知らない人は知らない、という傾向がありました。料理は人気なのに何故無関心層が多いのか、その理由を考えると、「料理」というモノを通してだと韓国人そのものを見る可能性は低いからではないでしょうか。ある曲をきいてそれを歌う人や作った人、言語、歌詞の意味等が好きになるように相手の国の「人」を感じられるような文化を媒介にして、言葉等を含めた文化を深く知り、それを浸透させていくことが相互理解に最も効果的だと考えます。

1.2 韓国側

では、わからないという回答が 60%～70%、好きという回答が 20%～30%、嫌いという回答は 10% でした。ここから読み取れることの一つは韓国に対して無関心な人がかなりいたことです。女子大生の層で「わからない」という回答が多かったのは、一つのポイントだと言えます。そこで無関心層を肯定派に変えることができれば関心がむき、日韓の相互理解につながるのではないかと考えます。「好きになること」と「知ること」は相互作用です。韓国文化を好きになると、自然と言葉や文化がはいってくるからです。言葉や文化を少しずつ知っていくことで、また更に違う分野の肯定、共感できる部分が見つかったり広

がったりします。アンケートから読み取れる二つ目のポイントに、韓国文化でも料理は一般的に人気だが、他の分野ではよく知っている人は好きだけど知らない人は知らない、という傾向がありました。料理は人気なのに何故無関心層が多いのか、その理由を考えると、「料理」というモノを通してだと韓国人そのものを見る可能性は低いからではないでしょうか。ある曲をきいてそれを歌う人や作った人、言語、歌詞の意味等が好きになるように相手の国の「人」を感じられるような文化を媒介にして、言葉等を含めた文化を深く知り、それを浸透させていくことが相互理解に最も効果的だと考えます。

2. 第2次発表

日本と韓国の未来について、文化の面から考えていきます。発表の流れは文化の大きい影響力を具体例によって確認し、悪い影響を与えてしまう可能性についても言及します。ここで日本側からでた提案と韓国側からでた反論を通して、文化面からも歴史認識の問題が大きかったことを再確認し、最後に私たちの主張を述べます。

文化の大きい影響力を両国の具体例から見ていきます。まずは韓国側から、韓国日本語日本文化学会で2000年にしたアンケートを用いて説明します。日本文化解放の前後を比べてそれがどんな影響を与えたか示すものです。日本に対して肯定的な人は1990年には5.4%だったものが1999年47.7%、反対に否定は1990年には66%、1999年には13.4%で1998年以後に変わったことがわかります。日本大衆文化解放とは韓国政府が韓日国交正常化以降にも禁止し続けた日本大衆文化の流入を1998年10月に許容した政策で、当時の金大中大統領は段階的に日本文化についての解放を指示しました。

次に日本における韓国のイメージについて見てみます。2008年にまとめられた内閣府の「外交に関する世論調査」によると、日韓関係を良好と判断した人の割合が2002～2004年は59%、60%、57%と、86年以降約20年間の中で最高となっています。これは2002年に開催された日韓共催ワールドカップや2003年に日本で放送され大ヒットした韓国ドラマ冬のソナタの影響が大きいと考えられます。

一方、日本で「竹島の日」が制定された2005年、小泉元総理の靖国神社参拝が問題となった2006年には日韓関係を良好と判断する人の割合が著しく低下していることがわかります。

これらのことから、政治問題では日韓関係が悪化するように感じる人が増加すると言えます。その一方で、文化の影響を通してでは、日韓関係に対してより多くの人プラスのイメージを持つようになったとも言えます。

これまで見てきた韓国と日本における文化の流入の例によって、文化が両国のイメージに与えるプラスの影響は非常に大きいものであると言えます。

これまで文化の良い面を紹介しましたが、次に文化の難しい面について触れます。まず、取り上げる内容の問題です。一つ目に両国の悪いステレオタイプが形成される危険性があります。例えば、日本のドラマで韓国の登場人物が「気性が荒い」という設定になると、日本人の中で韓国人の悪いステレオタイプができてしまいます。また二つめに、取り上げるテーマの問題があります。議論の中で取り上げられたのはジブリの「風立ちぬ」です。「風立ちぬ」は戦時中に使われた日本の飛行機である0戦の製作者の生涯を描いた映画です。韓国の多くの人はずぶりが好きでしたが、この映画によってジブリへの反感を感じた人が多くいたそうです。

文化の難しい面の2つ目としては、表現者の意図が正確に伝わらない可能性がある点が挙げられます。これは、対話などの人との直接交流とは異なり、ものを介した間接的な交流であるため、表現者自身の直接的な説明ができないことが理由に挙げられます。

また直接的な説明の代わりに、メディアが文化を媒介するため、メディアの取り上げ方

によって、文化のイメージが大きく左右されてしまうという点もあります。

このことは、互いの文化に対して無関心な人たちが、メディアによって作り上げられた悪い文化のイメージに影響を受けてしまうという危険性をもたらします。

これらを踏まえて日本側から日本と韓国が共同で文化をつくりだし、それを世界に発信するというアイデアを出しました。例えば日本の映画、韓国の映画などの日韓の文化をまとめて紹介する雑誌をつくる、といったことです。しかし、結局「韓国の映画は韓国のもの」「日本の映画は日本のもの」となり区別化されてしまう可能性があること、日本と韓国のどちらかに利益が偏ってしまつては逆に国家間競争が激しくなる可能性があるということへの危険性が指摘されました。

韓国側からは、日本が歴史的な謝罪をしないと協働は難しく、謝罪がない限りはタッグを組んだとしても競争になってしまうという意見がでました。

日本側として、韓国が歴史認識問題を重要と考えていることに気づかず、歴史認識問題について国民が考えていないことが問題です。

文化は互いの国家のイメージを改善できる面を持ちますが、その反面、歴史や政治の問題に影響を強く受ける面も持ち合わせています。やはり歴史問題や政治問題を置いておくことはできません。今の日本と韓国では協働して盛り上がりづらい雰囲気があります。

歴史問題や政治問題が解決されないからといって、文化の動きを止めるということではありません。文化の力が大きいことは事実です。

そこで私たちは、歴史問題や政治問題を解決するのと並行して、文化がどこの国のものかに執着せず、純粋に良いものだと捉えていくようにすべきだと考えます。今の日韓の状況を悲観的に捉えすぎず、日本と韓国の未来を見据えてこの問題に取り組みつつ、日韓の共生に向けて今後文化を共同発信していくことを目指していきたいです。

参考文献

- ・内閣府「外交に関する世論調査」
<http://www8.cao.go.jp/survey/index-gai.html> (2016. 8. 5 閲覧)
- ・「日本文化についての認識と受容態度—日本大衆文化開放以降を中心に—」
- ・ 김거수성 한국일어일문학회 (2000) 「일어일문학연구」 37 권 0 호

交流の促進から日韓交流へ

4 班（直接的日韓交流）

1. 第 1 次発表

1.1 日本側

私たちは、日本と韓国が共生していくために、直接交流の促進が必要だと考えた。そこで、現在日本で行われている韓国との交流について、NGO・NPO 団体、サークル、学校、姉妹都市に焦点を当ててそれぞれ調べることにした。まず、現在ある NGO・NPO 団体としては、外務省による日韓社会文化フォーラム、国際交流 NGO ピースボート、NPO 法人日韓文化交流会などがあげられる。中でも、NPO 法人日韓文化交流会は、料理、衣装、テコンドー体験のような文化面での交流が盛んだ。直接交流をメインとする団体が非常に少なく、あったとしても表面的な交流にとどまっているということが課題である。次に、サークルに関しては、大規模な大学に多く見られ、長期休みに日韓の学生が共に過ごし議論を交わすサークル、韓国語取得をメインにするサークル、韓流の芸能好きが集まるサークルの 3 パターンに分けられる。最近できたものが多く、また、実際に韓国人と交流しているサークルが、NGO 団体と同様に少ないという現状だ。日本人女性の割合が高く、韓国人留学生が少ないというのも課題である。

次に、日本と韓国の姉妹都市について考察した。日本では、17 の都道府県、117 の市区、26 の町村が韓国と姉妹都市を提携していることがわかった。提携数は、アメリカ、中国に次いで三番目に多い。経済、文化、人の交流など、場所によって様々な活動が行われている。また、姉妹都市連携をしている都市同士は自然環境が類似している、あるいは提携前から市民レベルで交流しているなど、提携のきっかけとなる事象がある。姉妹都市の提携により密な接点ができるが、国レベルの政治的な問題で交流事業が中断されるという問題点もある。歴史教科書問題と小泉首相の靖国神社参拝、竹島問題の際、日韓の自治体交流事業、学校や民間団体の交流事業が中止されるケースがあった。

続いて、日本の学校で行われている日韓交流の現状と課題について考察した。現在、日本では、主に文部科学省の事業や学校独自の取り組みとして、高校生・大学生を対象に交流事業が行われている。日本人学生が実際に韓国に訪れたり（もしくは、韓国人学生が日本に訪れたり）、テレビ電話を用いたりすることで、交流を図っている。交流の内容としては、お互いの国のスポーツや音楽を一緒に体験したり、同じテーマの研究を共同でやったりするなど、幅広く取り組まれており、交流に用いる言語は、日本語・韓国語・英語が多いようである。このような直接交流を通して、最終的に多くの学生が、お互いの国に対するイメージを良い方向に変化させたという成果が得られている。一方で、課題は、継続性がないこと、歴史問題に関するタブーな点までは触れないこと、が挙げられている。ただ、継続性に関しては、近年普及している SNS を通じて繋がっている学生も多いようだ。

以上をまとめると、直接会って交流することの良い点は、密な接点ができること、イメージが良くなることが挙げられる。また悪い点は、継続性に欠けること、深いところまでの交流が難しいことが挙げられる。

さらなる調査として、新大久保で行われている日本人と韓国人の交流会に参加してインタビュー調査を行った。この交流会では「韓日親善交流会」という非営利団体が韓国に興味がある日本人と仕事や留学で日本に来ている韓国人の交流を目的として、週に一度語学勉強会を開催している。参加者は 20 代が多く、仕事や趣味をきっかけに参加している人が

多かった。また、反日・嫌韓感情を持っている人は若い世代ではなく、年配の世代が多いのではないかという声もあった。この交流会はお互いの国に興味を持っている人にとってはよい場所だが、悪い印象を抱いている人を交流に参加させることは難しいという問題点がある。ただ、無関心な人を巻き込んで良い印象を抱く人を増やすことはできるのではないだろうか。以上のことを踏まえて、第2次発表に向けて、学生にできることは何か、無関心な人を巻き込むためには何が必要か、共通点や違いを交流に繋げるにはどうしたらいいかを話し合いたいと考えている。

1.2 韓国側

第1次発表では、韓国と日本の直接的な交流を促進する方法を探した。

まず、両国間の直接的な交流を妨害する要因に関するアンケートを行い、直接文化体験したあと、感じたことと問題点について考えた。アンケートでほとんどの人が韓日間の交流に参加したいと回答したが、参加する意向がないという答えも10%以上あった。その理由では歴史問題が97%、情緒問題が16%だった。

このような否定的な要因を緩和する一方で、情緒的な違いを狭めるために文化体験を行った。その体験を通じて、現在、文化体験に関する広報が十分に行われていないということが分かるようになった。そのため、文化体験に参加する人とスタッフの数が不足していて、文化を体験する上で、ほとんどの体験者が困っていることも分かるようになった。しかし、思ったより多くの人たちが韓日交流を肯定的に考えているという点で、このような問題点を改善していくことができれば、お互いの文化体験が、韓日交流に肯定的な役割になり得ると思った。

2. 第2次発表

私たちは、第1次発表から、直接交流には①交流促進のために学生にできることは何か②無関心な人を巻き込むためには何が必要か③共通点や違いを交流につなげるにはどうしたらよいか④文化交流への参加者を増やすにはどうしたらよいか、の4つの課題があると考えた。そして、これら4つの課題に対する解決策を見出すために、私たちは、浅草に来た韓国旅行者と昨年お茶大の日韓フォーラムに参加した日本人学生を対象にインタビューを行った。旅行者をインタビューの対象にした理由としては、互いの文化に興味のない人も、伝統的な文化だけでなく現代の日本文化を自由に体験でき、かつ人対人の交流にも通じる体験をできると感じたからである。韓国人旅行者へのインタビュー内容は①日本へのイメージの変化②日本に来た理由③浅草に来た理由④もう一度日本に来たいと思うか⑤今回の来日で日本人と交流できたか⑥日本人と交流したいか⑦日本人のガイドがいたらどう思うか⑧旅行を通して不満に思っていることはあるか、の8つである。日本人学生に対するインタビュー内容は①韓国へのイメージの変化②もう一度韓国へ行きたいと思うか③韓国人との交流は十分にできたか④韓国人のガイドがいたらどう思うか⑤不満に思ったことはあるか、の5つである。

1つ目の問題の交流促進のためにできることについては、大学生の場合はサークル活動を通して日韓の学生や観光客と交流を図ることが可能である。さらに実際に交流を行った学生は、交流を行った感想を報告書やSNSを利用して友人や家族に広めることもできる。また浅草でのインタビューの際、サッカーの親善試合で来日していた韓国の子供も達は、スポーツを通しての交流に意欲的で、日本人の子供も達と友達になりたいと回答していた。このことからスポーツを通して交流をすることも可能だと言える。2つ目の問題の無関心層を巻き込むことについては、お互いの国にもともと興味が無い人の考えを変えることに重点を置いて考えた。交流に無関心な人の中には、日本または韓国のことを嫌っている層

もいると思うが、そのような考えを持つ人々を交流させることは難しいと考えたからである。日韓フォーラムに参加した日本人へのインタビューの中で、韓国にあまり興味が無かったが、実際に交流してみて韓国の印象が良くなったという回答を得ることができた。3番目の問題の、共通点や違いを交流に繋げるにはどうしたらいいかについては、韓国人は日本固有の、日本人は韓国固有の文化を体験し、互いの理解を深めることが出来ると考えた。例えば、日本大使館での七夕の笹飾り体験や韓国大使館でのチマチョゴリの着付け体験、また、j-pop や k-pop のコンテストを通して現代的な文化体験をすることもできる。最後に、参加者を増やすにはどうしたらいいかという4つ目の問題については、広報の活動の充実が必要だと考えた。そのためには、SNSを利用して情報を拡散したり、参加者が体験談を広めたりする必要がある。また、文化体験の催し自体の見直しも必要だと考える。参加者が興味を持ちやすい、現代的な文化体験をもっと取り入れた方がよいと感じた。

インタビューを通して、この他にも、フォーラムなどの日韓交流の場に参加したことでマイナスイメージを持った人が見られなかったということ、交流の時間と親密度は比例するということが、またその一方で、日本を訪れてみて、もう一度来たいと思わないという人がいたことが分かった。ここで、日本にもう一度訪れたいと思わない理由として、私たちは、友達ができなかったからではないかと予想した。そしてその原因には、言語の壁があるということ、そもそも観光客の友達作りの場が無いということにあるのではないかと考えたのである。このことを解決するためにはどうすればいいか。まず言語の壁に関しては、アジア希望ワークキャンプ機構や韓日親善交流会といった言語を教えあう場を増やすことが必要である。また、そもそもの友達作りの場が無いということに関しては、観光客が現地の人と交流できる場を設けることや、お茶の水女子大学の ESS サークル、大阪大学の観光案内サークルなどが行っているような無料の現地学生ガイドを提供すべきなのではないかということが解決策としてあげられた。

日韓の直接交流の促進から日韓共生のために私たちがこれからすべきことは何なのか。今回私たちが経験した日韓セミナーで得たことを家族や周りの友人に伝え、さらには次世代の子どもと共有することが欠かせないだろう。身近なところから反日、反韓感情をプラスイメージに変えていくということである。私たちは、政治的、歴史的なものとは切り離し、人と人との交流を大切にすることが非常に大事なことであると考えている。小さなことから直接話していくことで、将来的に日韓共生というものは達成できると確信している。

参考文献

在大韓民国日本大使館 http://www.kr.emb-japan.go.jp/cult/cul_guide_hist.html (最終閲覧：2016/09/20)

東アジアにおける女性福祉向上のために

5班（ジェンダー）

1. 第1次発表

1.1 日本側

5班は、女性が適切なワークライフバランスを保つために重要だと考えられる、育児休業関連制度について発表した。発表は大きく分けて4つのパートから構成し、公務員・民間企業における制度内容と制度利用の現状についての調査から、民間企業に焦点を当てて制度利用における問題点を挙げ、最後に女性福祉に力を入れる企業の取り組みと問題点についてまとめた。

公務員は、3年までの育児休暇取得や子の看護休暇、深夜業務の制限などが法律で定められており、女性の育児休暇取得率はほぼ100%と、十分に制度が機能していると言える。一方で、民間企業における女性正社員の育児休暇取得率は8割を超えており一見高い数値にも見えるものの、実際は出産前に退職してしまう女性が6割強おり、継続就業率が低いという問題を内包していた。短時間勤務制度などの利用率は、従業員数によって差はあるものの、どちらも高いとは言えない結果だった。

私たちはこうした民間企業での低い制度利用率の原因として、制度自体の認知度の低さが一つの原因であると考えた。勤務先の短時間勤務制度についての認知度は男性で26%、女性で63%と男女間で差がある。また、制度によっては、男女ともに認知度が半分に満たない場合もあることには驚いた。そして、こうした認知度の低い企業では、制度を利用しても、給与や評価、その後の昇進への不安がつきまとう。当人の育児と仕事の両立を支援するだけでなく、周囲の理解、全体の雰囲気の良いのためにも、制度周知だけにとどまらない企業の積極的な取り組みが必要不可欠である。

先進的な取り組みをしている企業として、資生堂が挙げられる。手厚い育児休暇、社内保育、人事異動に関する配慮、勤務時間の短縮など、育児支援のための様々な制度の存在が、出産時退職者の少なさや管理職に占める女性割合の上昇につながってきた。

しかし、こうして女性や育児に優しいと評価されてきた資生堂も、近年、短時間勤務者の著しい増加によって通常勤務者から悲鳴があがり、ついに短時間勤務者にも遅番や土日勤務を担ってもらうという新たな制度が設けられた。積極的に女性福祉・育児支援をリードしてきた企業が、消極的な制度に乗り出したというこの事例は、ワークライフバランスの制度改革に取り組む他の企業にも少なからず影響を与えうるだろう。継続的で安定した支援を行うためには、どのような制度が必要か再考する必要がある。

1.2 韓国側

韓国の女性の仕事と育児の両立を実現するための対策を調査するために、まず、公務員と民間企業の現状を調査し、それを元にアンケートを作り調査を実施した。アンケート調査では計71人の女性社員の生の声を聞くことができた。

最初、公務員の女性福祉と育児休業に関連する韓国の法を調べた。韓国の現行法上、出産休暇は90日、健康な時にも取得することが可能な女性のための休暇は、毎月1日設けられていたが無給であった。また、このような法を適用している事例として、韓国の代表的な公企業の一つである、石炭公社と韓国水力原子力を調査した。この2社はともに、育児退職時の給与はなく、会社レベルで実施している女性福祉に関する取り組みは、保育費と

学生支援だけだった。

韓国の民間企業は、公企業に比べて柔軟かつ実践的に女性の福祉に取り組んでいた。ただし、男性の割合が高い企業は、女性福祉に関する取り組みに消極的で、女性の割合が高い、もしくは男性と同じくらいの比率の企業は、女性福祉に関する取り組みに積極的であった。

男性の割合が高い企業の事例である東国製鋼と現代自動車は女性福祉の取り組みとして、教育費支援や、子どもの出産の際の祝賀金支援を行っていた。一方、女性の割合が高い企業の事例であるユハンキンバリは、ユニークな女性福祉に関する取り組みを実践している。ユハンキンバリは女性や家族に優しい企業であり、家庭と仕事を両立できる環境を提供していることで有名だ。女性を事務補助・経理だけでなく正社員として採用することを初めて試みた会社である。育児休職は男女ともに使用可能で、時短勤務もすることができる。また、「働くママのカンファレンス」という女性ためのフェスティバルを定期的に開催している。

次に実施アンケートについて述べる。2016年7月6日から7月10日までの計5日間のサラリーマンの女性を対象に「社内福祉施設に対するアンケート調査」を実施した。回答者は71人で、Facebook、カカオトーク、同感（同徳女子大学のコミュニティ）、カフェなどを介して参加した。20代45%、30代39%、40代14%、50代1%で、20代の女性の回答率が最も高かった。また、公企業の回答者21%、民間企業の回答者78%で、民間企業の会社員の女性の回答率が高かった。

自分が所属した会社の福祉に関する質問に対しては、育児休職制度、健康検診の項目を挙げた人が65%で最も高く、昼食提供60%、慶弔金支援59%、貸付制度31%、その後は子女教育費支援、通勤バス運営や交通費支援28%と続く。その他の項目では社宅の提供、保育園の運営などがあつた。また、組織内の育児休職や子供の具合が悪いときに早退する制度がうまく機能しているかについての質問には「よくできている。」の回答が31%で最も高く、その後は「普通だ」「まあまあだ」「全くそうではない」「大変よくできている」の順であつた。

社内福祉のうち、子供の養育に関連する自由意見を、構造的な側面と認識的な側面に分けてみた。構造的な側面においては、出産休暇の日を増やしてほしい、子供が保育所で生活する時間に集中して仕事の処理をする制度（タイム制度）の導入が必要である、勤務中に信頼して任せられる保育所や病院などの機関を設けなければならないなどの意見があつた。認識的な側面においては、福祉制度はあるが、上司の圧力のためにろくに利用できない場合が多い、女性も男性も育児休職を利用できる雰囲気が必要だなどの意見があつた。

2. 第2次発表

第1次発表で調査した日韓の育児休業関連制度とその利用実態をもとに、日韓が共通して抱えている問題をあげ、その問題の解決策を提案する。私たちは、日韓の共通の課題として、「職場に育児休業関連制度を利用しがたい雰囲気がある」という課題を取り上げた。このような雰囲気を形成する要因として、私たちは管理職における女性の割合に注目した。女性管理職の割合は日韓ともに11%で、管理職に男性が多い状況では女性のための支援を実現すること自体が難しくなると考えられる。また、出産を機に退職する女性が多いという現状を考えると、管理職に就く女性の中で出産や育児を経験している人は少ないことが考えられる。このことから、管理職における女性の割合を増やすことが最優先であると考え、そのための解決策を模索した。まず、安倍晋三首相、朴槿恵大統領政権下では、どのような取り組みが行われているのかを調べた。日本政府は女性管理職を増やすための様々な政策を実施しようとしているが、韓国政府では女性に関する政策が多少保育や育児に偏

っていることが分かった。したがって、韓国でも女性管理職を増やすための政策は取られるべきであるし、また同じ問題を抱えている日本の政策が成果を上げれば、韓国でも女性管理職を増やすための政策が活性化するきっかけとなるのではないだろうか。

では、実際に一度育児休暇を取得した女性が同じ職場に復帰することを容易にするための対策としてどのようなものが考えられるだろうか。私たちは、在宅勤務などの「過程」を設けることを提案する。育児休暇を取得しながらも徐々に在宅勤務などの割合を増やすことで仕事との関わりを完全に断ち切る期間を減らすことができ、職場復帰が容易になるのではないか。これらの提案に基づき、日本と韓国における現状を調べた結果、日本では在宅勤務を可能にしている企業の成功例が未だ見られなかったが、韓国においては成功している企業例が見られた。いくつかの大手企業では、育児休暇の取得後に在宅勤務と「スマートワークセンター」での仕事を通して職場復帰をするという制度を導入しているようだ。スマートワークセンターとは育児休業の後の在宅勤務を終えた人が職場復帰までの間に働くという制度で、会社近くの建物の一室を借りて家ではない場所で働くことで職場の人と顔を合わせることや会社側が容易に仕事を管理することを可能にすることを目的としている。

以上示したように、在宅勤務等の「過程」を設けることで出産・育児を経験した女性も仕事を継続でき、キャリアを積むことで管理職における女性の割合が増えたと仮定すると、会社全体の育児休暇に対する理解が得やすくなるのではないか。働きたい女性の多様な働き方の実現を通して、女性が東アジア共同体として経済界をリードしていける存在となることができればいいと考える。

参考文献

社内福祉施設に対するアンケート調査 <http://naver.me/5Z8d09B0>（最終閲覧：2016/09/30）

日韓友好に繋がる一歩

私にとって、このようなセミナーへの参加は2回目、今回はこれまで行ってきた過去の問題に目を向けるということ踏まえ、今後の日韓がどのような関係を作り上げていくべきなのかということを考えることが私の大きな課題であった。私たちの班では、日韓の都市における共生について取り上げ、第2次発表では、特に日本における日韓共生のための課題と方策を考えた。この課題を通し「共生」とはなにかについて、時間を費やして討論した。第1次発表に向けて行った現地調査では、現在大きな問題は生じていないというインタビュー結果から上手く共生できているのではないかと感じた。しかし、新大久保、東部二村洞の実態を見ると、日本人と韓国人の間の問題が少ないからといって、上手く共生していると言うことはできない。共有のコミュニティも少なく、互いに距離を置いている場合、大きな問題も起きにくい、地域住民としてのつながりがなく、どこか外国人を一時滞在者としてみなしてしまっているからだ。この課題を通し、私たちは、うまく共生することはその地域に生活する人々の間で問題が生じないということではなく、様々な交流を通し、問題を住民中心で、解決していくことができるコミュニティが存在していることであると気づくことができた。また、都市共生においてのみならず、様々な背景を持つ人々が共に生きるためには、交流を欠かすことができないのだと改めて感じた。

また、今回のセミナーでは、第1次発表を韓国語で行うということもあり、参加者が韓国語を学んだことも、とても価値のあることであった。私自身、簡単な文を理解する程度の語学力しかないが、一方的に日本語で自分の思いを伝える時と比べ、韓国語を使った時の方が、より思いが伝わったように思う。また、韓国の学生が日本人の日本語を理解しようとするだけでなく、韓国の学生が上手く日本語にできない時、自分も何を伝えたいのか歩み寄ることができる知識が付き、互いが互いの思いに耳を傾け理解しようと努力し合うことができた。さらに、韓国語を学んでよかったと感じたのは、ふとした時、簡単な文であっても、誰かの翻訳を介すことなく、直接、相手の気持ちを理解することができた時であった。素直な気持ちを共感しあえることで言葉の壁が低くなったように感じたし、自分たちの言葉で思いを伝え合うことの喜びを感じた。また、セミナーが始まる前は、韓国語で発表することで余計に内容が伝わりにくくなるのではないかと不安だった。しかし、一次発表の前日、日韓の班員が寝る間も惜しんで、互いのPPTの最終チェックを行い、発音練習をしたことでより良い発表が出来たと思うし、発表を作り上げるという共通の目的を持って努力したことは心の距離が随分近づききっかけになった。

さらに、今回のセミナーでは、韓国の学生とともに現地調査を行ったことも、強く印象に残っている。第2次発表に向けて、新大久保で現地調査を行った際、韓国語の情報や人々の様子など、私たち日本人だけでは気付かないことから新しい発見を得られただけでなく、インタビューや街頭調査では、より詳しく話を聞くことができた。そして何よりも、韓国と日本、2つの視点から共生に向けての話し合いを行い、私たちなりの答えを出せたことはとても意味があるものであった。時間が足りず、若干消化不良な面もあったが、与えられた時間内で日韓それぞれの学生としてだけでなく、目標を共有する仲間として、真剣に話し合い、活動できたことで多くの学びを得ることができた。

約1週間のセミナーを通し、バディを始め多くの仲間ができた。そして、この仲間が住む韓国と日本の友好的関係の構築への思いがさらに強くなった。私たちが今回行った共同作業は小さな一歩かもしれないが、今後の日韓のための大切な一歩になったと思う。今後は、この貴重な直接交流の中で学んだことをさらに深め、これからの学びに生かしていきたい。

日韓セミナーに参加して

今回日韓セミナーに参加しようと考えた理由は、日韓関係は政治的な問題などで冷え込んでしまうことがあるが、同じ世代の韓国の学生たちは日本に対してどのように考えているのか非常に興味があり、また学生同士なら考えていることを素直に言えてより深い話ができるのではないかと考えたからだ。今回の私たちの班のテーマは、都市における日韓共生ということで、文化や言語が異なる人々がどのようにしたら同じ地域でトラブルなく共に暮らしていけるのかということについて考えた。実際にトラブルが起ってしまった地域を調査することで、どのようなところを改善すべきか見えてきた。日本側が調べた新大久保では、日韓での交流がほとんどなくコミュニティができていなかった。また最近ではコリアタウンというよりもエスニックタウンと呼ばれるほどに、韓国以外のインド、ネパール、タイ、ベトナムなど、多くの人びとが新大久保に居住したり店を構えたりするようになって、さらに地域のつながりが薄くなってしまっている。どのようにしたら地域のトラブルをなくせるかについて班のメンバーで話し合うなかで、韓国のジャパニーズタウンである東部二村洞にみられるように、トラブルが全くなくても地域のコミュニティができていない場所もあることから、日韓で関わりがないのは理想の都市共生ではなく、地域の人々が住民であるという自覚を持って生活すべきだという結論になった。同じ地域に住む以上地域の活動に参加して役割を果たすことも大切であるし、地域の人々の間でコミュニティができていれば、震災などが起こった場合もお互い助け合うことができると思う。また、このような住民同士のつながりがあれば、相手を「日本人」、「韓国人」などといったカテゴリーで考えることなく、一人の地域の仲間としてとらえることができるのではないかと。そしてこのような意識の変化があれば、日韓関係が冷え込んでしまう時期があってもこの地域での日韓のトラブルは起こらなくなり、理想の都市共生ができるのではないだろうか。日韓でなくても住民間でのトラブルは起こることもあるが、日本、韓国に対して敵対意識を持っているために起こる問題は起きるべきではないし、住民同士で意見の違いなどがあっても、それを話し合っ解決できるような関係作りが重要だと思う。ただ日本のコリアタウンの場合、新大久保に来る観光客の人々は韓国が好きで韓国の文化に触れたいと思っている人が多いので、そのような人々も地域のつながりを作り関係を改善するために大事な役割があると思うし、日韓の問題をよく知った上で、メディアなどでつくられる一方的なイメージは正しいものではなく、相手にはこんな良い面があるということを知り、それを周りの人に伝えることができると思う。その意味で今回日韓セミナーに参加した私たち学生も、このセミナーでの学生同士の交流で感じた相手の良いところ、相手の学生の考え方を周りの人に伝えることが大切だと考える。

同徳女子大学の学生に会う前は、どのような話をすれば良いのかなどとても緊張したが、実際に会ってみたら班のテーマについてだけでなく、相手の国の文化や大学の話、家族の話、将来の目標、恋愛観など話は尽きなくて、一緒にいられたのはたった一週間ほどだったが、とても打ち解けることができ大切な友人を作ることができた。また、私たちの班はバディ同士の二人一組になって町中でインタビューをすることがあったが、二人で協力してインタビューをしたのは非常に勉強になったし、より一層バディのつながりが強くなりとても良かった。今回のセミナーは少し慌ただしく、グループでの話し合いの時間が少し短かったのが残念だったが、短い時間でいかに話し合い意見をまとめるのかということもとても大事だと思った。今回この日韓セミナーに参加できたことは、日韓関係を深く考えるうえでとても有意義な時間であり、貴重な体験になった。また今回出会うことができた韓国の学生たちは大切な仲間なので、これからもずっと仲良くしていきたい。

日韓交流セミナーで芽生えた韓国への 愛情と未来への決意

今回の日韓交流セミナーは私の韓国への印象を「何となく気まずい間柄の国」から「大好きなバディ、そして友人達がいる大切な国」へと大きく変え、「今後も日本と韓国との関係を良好にしてゆくため努力しよう」と強く決意するきっかけとなった素晴らしいものだった。同徳女子大学の学生達と交わした真剣な議論、日本語と韓国語を織り交ぜた会話、最後に贈り合った手紙。そして大好きなバディとの間に芽生えた友情。そのどれもが想い出として深く胸に刻まれている。代々木や草津のセミナーハウスでは食事の点で満足のおもてなしが出来なかったという反省はあるが、班のメンバーで出掛けた時の食事や観光の楽しさはそれを補って余りあるもので、密度の濃い時間を過ごすことができた。日本と韓国を大学生が繋ぐことへの可能性を大いに感じる事が出来た1週間だった。

交流を通じて得た言語的・文化的な学びは数えきれないが、韓国語の表現と日本語の表現に似た所が沢山あるという学びは今後韓国語を学ぶ上で最も重要であろうと思う。文化についても同じで、セミナーの間中ずっと「日本と韓国はこんなところまで同じなのか」と驚かされることの連続だったと言える。バディとはまず好きな音楽の話をし、さらに将来設計や勉強の悩み、結婚などについても語り合ったのだが、お互いに「分かる、分かる」と頷きっぱなしで話題が絶えることがなかった。また、就職活動の際に大学生が置かれる状況も両国で非常に似通っていた。韓国は就職難の時代に突入しており、文系学生が企業にほしがられない状況も続いているという。バディや班のメンバーの話では「韓国では本当に就職が難しい」ということだった。さらに、大学生の子を持つ親が子の安定した生活を望み「地元に戻ってきて公務員になれ」と言うのが韓国でも一般的であるということに私は大変驚いた。バディが両親にごく最近そう言われたように、私も地元に戻るたびに言われる言葉だったからだ。

また、半年間かけて日本と韓国それぞれが準備してきた第1次発表、そして最後に班の全員で完成させた第2次発表は今回のセミナーの成功に大きく貢献したと感じている。各班の発表と質疑応答を通して、日韓の政治的な壁を越え個人として真剣に日韓の問題に向き合うことが出来た。今回私達の班では日本最大のコリアンタウン新大久保と韓国のジャパニーズタウンである東部二村洞の両方について調査し、日韓両国における日本人と韓国人の共生の実態を探った。さらに共生する中で起きるトラブルについても実際に両都市でインタビューをして確かめ、「ヘイトスピーチなど大きな問題は見られなくなったものの細かいトラブルは依然として見られ、街全体として日韓の交流が深まるまでには至っていない」ということを知った。最後にこれからの共生に必要なのは日本人と韓国人がお互いに民族の違いを乗り越えて社会を共に創る仲間としての意識を持つことだという結論を出したが、ただ話し合っただけではなく、これを私達が実現してゆかなくてはならないという責任も感じた。

そして全体的な議論の中で特に印象的だったのは、日本の学生からはあまり発言がなかった慰安婦問題に対して韓国の学生は臆さず疑問や感想を口にしていたことだ。対話と説明を求め、未来を見据える姿勢が同徳女子大学の学生達には共通していたのである。「日本人は歴史にきちんと向き合おうとしない」という森山先生の言葉が身に染みて、「観光や遊びでお互いの国の事を知った気になってはいけない。気まづくなりそうな議論を避ける姿勢では何も解決しないのだ」と一連の発表を終えて痛感した。

今後は、「日本と韓国が仲良くなりますように」と班の全員で神社の絵馬に書いた時の気持ちをこれからも忘れず、次は私が韓国へ赴き、一生涯韓国の友人達との交流を続けていこうと考えている。そして日本と韓国が手を携えて未来へ進めるよう尽力してゆきたい。

日韓セミナーを通して学んだこと

私たちのグループのテーマは『日韓の共生のための、より良い都市の在り方』であり、結論として『日本に長く住んでもらうために移住する外国人への対応を整える事が重要』となった。私にとってこの対応とは、言語面での対応だと考えている。

上記について私達は『日本人と在日韓国人の間には恒常的にいさかいがあるもの』と思っていたが、誤りがあることに気付いた。実際は長く住んでいる在日韓国人は日本人と同じように暮らせるほど日本になじんでいた。共生に課題があるのは来日したばかりの韓国人であり、日本の風習になじめず、コリアンタウン内での流動が激しい為にコミュニティの形成ができない事に改善すべき点があると学んだ。その中で私が最も重要だと考えたのは、言語面での問題である。これに対して、『やさしい日本語』の認知度を高め、普及させることで解決の一助となるのではないかと強く感じた。

私が『やさしい日本語』の普及が一番大切だと感じた理由は、アルバイト先での体験がきっかけである。アルバイトで外国人のお客様に対して、日本人への接客と同じような言い回しや接客用語を使用しても相手に混乱を与えるだけだと体感していた。『やさしい日本語』を知ったことで日本語に不慣れな外国人に配慮した接客ができるようになった。この体験から、日韓の共生のために改善すべき言語面の問題に『やさしい日本語』が役に立つと考えるようになった。

私の考えを検証するために、今回のセミナーではバディに対して『やさしい日本語』をなるべく使用してコミュニケーションを行うように意識した。『やさしい日本語』はそもそも情報伝達の書き言葉であるが、この言葉の特性として主語述語がわかりやすく、日本語特有のあいまいさが少ない為、私は話し言葉としても有用なものではないかと考えていた。しかし、実際に使ってみると想像以上に難しいものだった。話者自身が自分の普段の話し言葉を瞬時に『やさしい日本語』に変換し口に出すまでに時間がかかってしまい、かえって円滑なコミュニケーションを阻害してしまっていた。それでも意識的に継続して実践し続けた結果、私の中で『やさしい日本語』が定着するのに合わせて相手に話したい事が正確に伝わるようになった。一度自分が話した後に説明を加えるということがなくなってきたのだ。以上のような経験から、『やさしい日本語』は話し言葉として使用するのは訓練が必要だが、日本語に不慣れな外国人とコミュニケーションする上では非常に有用だという知見を得た。これが交流を通じて得た、私の言語的な学びである。

最後に、このセミナーは私にとって韓国人の人となりを深く知ることができ、これまでの韓国への偏見を改めることができ非常に良かった。これは1週間寝食を共にする本セミナーでなければ体験できないことだ。一方で、グループを超えた交流があまりなかった点は非常にもったいないと感じた。せっかく多くの韓国人学生が参加しているにも関わらず、交流できた人が限定的だった点は改善してほしいと思う。

貴重な機会をいただき、誠にありがとうございました。

日韓／韓日の共生にむけて

私たちのグループでは「歴史認識」を大きなテーマとして掲げ、第1次発表では幅広い世代の人々を対象に行った歴史認識に関するアンケート結果をもとに考察をし、第2次発表ではその内容をふまえたうえで、韓国側の学生との対話を通じて「歴史教育と日韓／韓日の共生のあり方」を模索した。そのなかで強く感じたのは、歴史教育のもつ力の大きさ、そしてそれをより良い方向に持っていくことの難しさであった。多くの人が反日・嫌韓感情の原因は歴史認識の違いにあると考えている一方、日本と韓国の歴史に対し深い知識を持っている人は少ない。歴史認識の改善から共生の道を探っていくためにはこの矛盾を解消する必要があるが、自国の立場に偏らない歴史を、歴史にあまり関心のない人々や教育を受け終えた世代にどのように伝えていくかという点はまだ議論の余地が多く残されているように感じた。今回の第2次発表では共通教科書の使用を提言として挙げたが、それをいかに有効に使っていくのか、どのようにして普及させていくのか、という点は今後も自分なりに考えていきたいポイントである。歴史認識の改善が両国の関係改善の一助になるはずだということはアンケート結果からも推測できるため、それに向けた現実的な具体策を考えていきたい。

続いて、韓国の学生との交流を通じて得た学びとしては、文化的な学びが非常に多かったように感じられる。今まで知らなかった韓国の文化や、韓国における日本文化がいかに受容されているのか、といったことなどを直接教えてもらい、メディアを介して知る韓国とはまた違った一面を垣間見ることができた。それと同時に、ともに生活をするなかでは、日本人と韓国人の間にはいわゆる国民性の違いのようなものが存在するのではないかという印象も受けた。「日本のみんなは思ったことをあまりはっきり言わないけど、韓国だとみんな思ったことをそのまま伝える」といった主旨のことを韓国の学生も話していたように、おそらくこの印象は日本・韓国どちらの学生も少しは抱いているものなのではないだろうか。ただ、ここで私がひとつ学んだのは、両国の国民の間の違いというのは必ずしもマイナスに働くものではないということだ。一般的に「日本と韓国では国民性が違う」というとその差異自体を非常にマイナス要素の強いものとして捉え、相手を異質なものとして遠ざけてしまうような印象を受ける。しかしその差異そのものを否定するのではなく、それを「韓国の学生が自らの考えを明確に伝えてくれるからこそ本音で向き合える」といったように、その違いを受け入れた上で互いを尊重していくことができれば、個人レベル、ひいては国家レベルでもより良い友好関係を築いていくことができるのではないだろうか。

もっと積極的に議論に参加する必要があったのではないか、セミナー開始前にもっと韓国語を学んでおくべきだったのではないか、といった個人的な反省点はいくつかあるものの、総じて得るものが多く、このセミナーでは非常に充実した時間を過ごすことができたように思う。特に、グループ討論の時間以外にも自由に話をする時間が多く設けられており、韓国の学生と話をする機会を多く持つことができた点は、お互いのことをより深く理解するきっかけになったと言えよう。今後も今回のセミナーでできたつながりを大切にしながら、韓国に対する理解を深めつつ、日本と韓国の共生のために必要なこと、そしてその実現のために自分ができることを継続的に考えていきたい。

コミュニケーションの大切さ、難しさ

私たちの班は日本と韓国で異なる歴史認識について議論した。日韓セミナーのテーマが「共生」というものだったため、その違いを乗り越える方法を模索した。特に現在に繋がる現代史や第2次世界大戦について多く話したように思う。事前調査では日本側と韓国側で共通の内容のアンケートを取り、私たち日本人側は千葉県の高井高校で歴史を教えている吉井先生にお話を聞いた。その際に元福岡韓国教育院長の金グァンソプさんの講演もお聞きした。セミナーが始まってからは自分達が使用していた歴史の教科書を比較し、認識の差異を解消する方法として日韓共通、もしくは東アジア共通の歴史教科書や、メディアを使った歴史教育について話し合った。

今回のセミナーの発表で私たちが出した結論は、「歴史認識の差異を乗り越えるためには、お互いの認識や考え方を理解し、世論に簡単に影響されないことが必要だ」「同じ認識を持つことは不可能だが、その状態を目指して努力すること自体に異議がある」ということだ。口に出すことは簡単だが、この2つを実行することは非常に難しい。アンケートで歴史認識の仕方の違いや歴史教育が日韓の対立を生むと感じている人は少なくなく、また日韓で仲良くしたい、協力したいと考えている人は世代を問わず多いという事実が判明したが、それらが未だに実現していないのはそのためだろう。例えば1つ目の「理解する」ことだが、自分は相手のことを理解しているつもりでも実は「知っている」だけであり「実際には分かっていない」、という例は多い。私は日本人が、戦時中に日本が行った非道なことをほとんど知らず、韓国人は日本人より多く詳しく知っているということは知識として知っていたが、今回はそのことを実感したように思う。例えば日本が外国人に行っていた人体実験について、韓国側のある生徒は、韓国人に行われなかったことについても詳しく知っていた。その話は私の想像を超えるものであり、私は何を知らないのか、学んだ内容量の差がどれほど存在するのかを具体的には理解していなかったのだと気づいた。相手の考え方を理解するという事は自分と相手との差や違いを正しく知ることから始まり、それにはやはり深い対話が必要なのだろう。私たちはお互いに話し合うべきなのだと感じた。それは歴史や政治のようなシリアスな話だけでなくドラマや恋愛のような雑談も含むのだろう。そのような様々な話をする機会を、セミナーで多く持つことができ非常に良かったと感じた。

言語面で特に強く感じたことは簡単な日本語はとても難しい、ということだ。韓国の学生と分かりやすく話す際には可能な限り平易な日本語を使うことを試みたが、それでは細かいニュアンスをうまく伝えることが出来ない。簡単な日常会話であるならそれでも問題は無いが、議論をするには難しい単語を避け続けることは出来ない。また非ネイティブでも理解しやすい文の構造を、口頭で瞬時に組み立てることも非常に困難であった。通じない単語は日本語での説明に加えて、英語を使って伝えることができたが、私の英語の発音の悪さや英語の発音の癖の違いもあって、英語でも必ず通じるとは限らなかった。会話において必要不可欠な「伝える」ということはこれ程難しいものだったのだと感じた。他にも第1次発表を韓国語ですることによって、第2外国語、人によっては第3外国語で議論する韓国学生の苦労を垣間見たように思えた。また文化面では、セミナー中に韓国の学生からは様々な韓国の文化を学んだ。その中でも私が特に素晴らしいと感じたものが、韓国の学生が親しい女の先輩を「オンニ」、日本語で話す時は「〇〇姉ちゃん」と呼ぶ、という文化だ。年上や目上の人間への敬意を大切にする韓国文化を窺うことのできる、親しみと敬意を両立させた素晴らしい呼称だと感じた。このような良い文化を知りお互いの立場を尊重し合うためにも、対話や会話をする必要があるのだろう。

第11回日韓大学生国際交流セミナーを終えて

私がこの実習を通じて得た最大の収穫は、韓国にかけがえのない友人が出来たことである。1週間という短い期間のなかで、最後別れ際に涙を流すほどの深い関係を築けたのは今回が初めてかもしれない。私がこの実習に参加したきっかけは、周囲の影響もあって韓国の政治については「韓国人」にまである種悪い固定概念をもちそうだった当初、それを払拭したい、確かめてみたいという意識があったように思う。実際セミナー前日まで、韓国の人たちがどのような人なのか、どれほど仲良くなれるのか不安であった。しかし、韓国の友達は皆本当に親切で思いやりがあり、心温かい人たちばかりだった。言語の違いで歯がゆい思いをしたことはあっても、たくさん笑い合うことができたし、支え合うことができた。韓国の文化や言語についてたくさんのことを教えてもらい、印象も大きく変わった。韓国語の可愛さや韓国製品の質の良さ、韓国との習慣の違いや共通点、料理の多様さなど多くの気づきがあり、自然と「いつか必ず韓国に行ってみよう」と思えるようになっていた。私がそれまで見ていた「韓国」は本当に狭くて表面的なものに過ぎず、隣国について実はほとんど何も知らなかったことを痛感した。たとえ政治的・歴史的に深い確執が残る国同士であっても、直接交流を通じて互いの良いところや共通点を新たに発見し深い絆で結ばれていく日韓の学生の姿を見て、そして自分自身もそれを体感することができ、その尊さと未来への希望を感じることができた。

またグループテーマである「歴史認識と教育」に関しては、日韓の歴史解釈のギャップの大きさを強く感じ、これまでとは違う視点で日本という国を見つめ直すことができた。日韓関係の亀裂に直接的に深く関わる問題であるだけに、今回韓国の学生とこの問題について議論し共通の方向性を見出すことができたのはとても貴重な経験であったと思う。慰安婦問題や強制連行、在日コリアンの歴史や安重根に対する意識の差などの多様なテーマを取り扱うなかで、私自身の歴史に対する知識の無さを痛感するとともに、立場が違えば同じ出来事でも皆それぞれの見方があること、また教科書比較では国家の意向を顕著に窺い知ることが出来て非常に興味深かった。そしてこの研究を通じて感じたことは、「正しい歴史」なんて存在しないということである。あるのは「後世に何を遺し、それをどう伝えていきたいか」ということだけであり、歴史とは数ある出来事のなかで何を抽出し、それをどう解釈して後世に伝えていくのか、その作業の繰り返りで紡がれてきたものだと考える。だとすれば、これから私たちがどのような未来を望むかによって、歴史は少しずつ変えていくことができるのではないだろうか。その一助として、やはり歴史教育の重要性を見逃すことはできない。国によって見方が異なる歴史的事項を、「違う」から敵対するのではなく、「違う」からこそ向き合って知ろうとする姿勢が必要だと感じた。そうすることで、歴史には答えがあるという誤解を抜け出し、歴史には多様な見方があるという、ということを伝えていかなければならない。「共通の歴史認識」がたとえ実現しなかったとしても、それに向かって努力し続け、それぞれの見方を知ることこそが最も重要なのだと感じた。

最後に、このような機会を設け4月から指導して下さった森山先生、金晞泳先生、朴恵仁さん、そして学生代表の皆様に感謝の意を表したい。1週間韓国の学生と寝食を共にしながら言語や国家の壁を越えて仲を深めることができ、とても充実した日々だった。バディを組んで準備を進めたり、第1次発表の韓国語の発音を見てもらったりした時間は互いの信頼関係を築く上で有意義なものだった。たとえ国家間で深い確執があったとしても、人と人は分かり合えるという確信を得ることができ、今回参加して本当によかったと思う。そして今度は、その分かり合えるはずの人同士が国という枠組みだけによって引き裂かれることのないように、私たち自身が責任を持って未来を描いていかなければならないと感じた。

セミナーで得たもの

日韓交流セミナーは、私に多くの学びを与えてくれた。

私は歴史認識のグループに所属していた。第1次発表のために、歴史認識についてのアンケート調査を行なった。この結果を受けて感じたのは、同じ日本人であっても、人それぞれ歴史についての見解は異なるということである。最もそれを感じた項目は、韓国の慰安婦問題について知っていることを尋ねた設問だった。日本政府が強制的にやらせていた、という人もいれば、軍や政府の関与はなく、身売りされた人が慰安婦となった、と回答した人もおり、ばらばらだった。野外実習では在日韓人歴史資料館を訪れた。私は、日本がかつて朝鮮の人々に対しひどい行いをしていたことを知っていたつもりだった。だが、それはあくまで「つもり」でしかなかった。多くの朝鮮人を強制連行して労働させたことや戦争に駆り出したこと、そして朝鮮人の戦死者に対しても差別が存在したこと、慰安婦がどんな扱いを受けたのか。資料の一つ一つを見るたびに、胸が痛んだ。被害者である韓国側から見たら、さぞや日本は許せない存在であっただろう。過去にこだわっているように見えていた韓国側の認識を理解するところへ、一步近づけたような気がした。第2次発表に向けた討論の中で気づいたのは、生きた知識を獲得することの面白さである。政治についての話が出たとき、韓国の歴代の大統領について教えてもらった。高校時代に授業で習ったが、彼らはただの暗記する対象でしかなかった。だが、韓国の子たちの話す歴史は面白く、もっと聞きたいと思った。韓国のメンバーが話すことによって、ただの教科書上の人物ではなく、実際に存在した人物として感じられたからだろう。同じ教科書を使って語るにしても語り手が違うと印象がこんなにも変わるものなのだというのも改めて感じた。私たちの班は共生への方策として歴史を教える教師の知識を増やすことも提案したが、その提案の意義を実感した瞬間でもあった。

言語や文化に関する学びも多かった。言語に関して印象深かったのは、完璧に正しい言葉遣いでなくとも、意図することは大方通じるということだ。韓国の学生たちが話す日本語には不自然な箇所もあったが、相手が伝えたがっていることを前にして、そのような不自然さはたいして気にならなかった。私は、英語で話すことにためらいや恐れを感じてしまう。自分の英語力に自信が無く、口に出した英語が誤った表現になって伝わらないのではないかと思ってしまうからだ。だが、一生懸命日本語を使い、コミュニケーションを取ろうとする韓国側の学生の姿が私に勇気くれた。伝えようという気持ちが大切だと学んだ。文化については、自分の国の文化を他の国の人が知ってくれると嬉しいのだということ学んだ。私は韓国の学生が日本語を使ってくれることも嬉しかったし、日本のドラマや慣習について思った以上に知ってくれていたことにも大変感銘を受けた。それと同じように、私が知っている韓国語や韓国ドラマについて話すと、韓国側の学生も嬉しそうにしてくれた。互いの言語や文化について知り、理解を深めることは異文化交流をする上で必要なことであると感じた。

一番の収穫は、韓国を好きになり、日韓が共生する未来を心から望めるようになったことだと思う。これまで、特に韓国が好きではなかった。だがセミナーに参加するにあたって韓国語を勉強し、韓国の学生と話し、韓国の文化や韓国人の考え方も知った。自然に韓国に対する理解を深めることができた。歴史というデリケートな問題についても話し合い、日本と韓国が共に歩む未来も一緒に考えることができた。そんな日が本当に来るのではないかと、むしろそんな未来を自分たちで作りたい。こんな風に、セミナーを通して未来を見据えるようになっていく自分に気がついた。決して楽ではなかったが、参加して本当に良かったと思う。自分を一回り成長させてくれたセミナーだった。

「文化」を学ぶということ

今回の日韓交流セミナーは、今後の日韓共生のために何ができるかという大きなテーマのもとに議論や調査を重ねた。私はその中で、一般の人々が毎日触れるもの、もしくは生活そのものとも言える「文化」なら、この問題に対して良くも悪くも大きな影響力を持っていて、共生のためのカギになりうるのではないかと感じ、日韓双方の文化についての印象や国自体の印象との関わりについて議論を深めた。私たちは当初、人々の間にプラスのイメージをもたらす文化を広めていけば、国の印象向上にもつながっていくのではないかと推測を立てたが、韓国側のアンケート調査の結果、「文化」のみを単独で取り出し、他の要素と切り離して考えることは不可能であることが分かった。このことはこのテーマから学んだ様々なことの中で、私にとっては衝撃的な事実だった。そもそも文化というものは、その背景に権力・メディア・歴史・生活など他のファクターが密接に絡み合って形成されてゆくものであり、人々の価値観や考え方に与える影響力は大きい一方で、それら他の要素に左右されやすいものであるということにも改めて気づかされた。韓国の人々にとっては「文化」の問題を考えていても、どうしても歴史認識の問題が絡んできてしまうという現状があったことも今まであまり知らなかったし驚きではあったが、それに引き換え日本では、文化と、歴史認識の相違による両国の摩擦とを結び付けて考える場合が少なく、歴史認識の問題に対しての日本の甘い考え方が露呈したような気がした。政府と大衆を別物として考え、国民や文化は受け入れられても政治は受け入れ難いとする韓国の人々が多かったという現状に、政府の深い謝罪は不可欠なのだとすることも感じられた。

韓国の学生と直接交流しながら意見を交わすという経験は私にとって初めてだったが、言語の観点から見ると韓国学生の日本語のすばらしさに感動した。自分の母国語を話してくれるというのは、単に言葉のコミュニケーションが円滑になるというだけではなく、親しみやすさや嬉しさを感じることで心の距離がぐっと近づくようなものであるという気がした。一方で私はこれまで韓国語を学んだことがほとんどなく、第1次発表で取り組んだ韓国語は本当に拙いもので、言語を学ぶ難しさを改めて実感するとともに、その分だけ韓国学生への感謝の念を感じた。文化的な面から見ると、「韓国人は気性が荒い」というようなステレオタイプは違ったとまず感じた。だが一方で、第2次発表の準備の段階では意見が合わなかったこともあったし、重点を置くポイントも違うような気がした。発表準備は時間の制約が大きかったこともあり、日本学生はある程度妥協してでも議論を進めようとする節があるのに対して、韓国学生は簡単には主張を曲げずに、自分が納得しなければ議論を深めてじっくり取り組むような印象を受けた。そのような議論への姿勢に、違和感を覚えることも少しはあったが、問題により真摯に向き合っているような気がして尊敬の念も覚えた。韓国人だから、日本人だからと一括りにしては危険だが、このような態度や考え方の根本的な違いはやはり多少なりともあるのだということを改めて感じた。このことから、机上の理論だけではわからないこともやはりあって、自分の感情や心の動きも伴う「体験」をするということが本当に大切なのだということを改めて感じた。

今回のセミナーでは、個人的にはこれまで自分の中には気づかぬうちに韓国の人に対するステレオタイプがあったことを実感したと同時に、それがいい意味で崩された。自分の価値観と経験に一石を投じたこのセミナーは、自分にとって本当に貴重なものとなった。また、韓国の学生の優しさと日本語の上手さに本当に助けられたセミナーであり、韓国側の学生への感謝の気持ちはここだけでは伝えきれない。今後も、両国の共生について関心を持ち続け、今回の交流により生まれた絆を細く長く続けて生きたいと思っている。

日韓セミナーを通して

私を含めた3班は、間接的な交流からの日韓関係の改善を目指して研究、討論をした。同徳女子大学の学生と討論を行う中で、文化のことを話しているはずなのにいつの間にか歴史問題や政治の話になってしまったことがあった。それほど歴史認識問題、政治的問題は大きいのだと感じた。韓国の人々は、日本の文化は好きであっても歴史問題を認めないから日本全体としては好きになれない、という人が多いようである、ということに実習を通して気づいた。それに対し日本人は、歴史問題もあるけれど韓国の文化は好きだし、韓国自体なんとなく好き、という意識であるように思う。この歴史認識問題や政治のことについての意識の差が、日韓関係において大きな壁になっているのではないだろうか。日本人は、韓国人ほどその問題について考えない人が多いため、そこをついてくる韓国人をうっとろしく思うかもしれない。逆に韓国人は、大きな問題を真剣に考えないでいる日本人にいらだつかもしい。意識する時点でまず差があるということを理解すべきである。実習を通してそのことに気づくことが出来たのも大きな学びである。

同徳女子大学の学生との交流から、彼女たちが本当に日本を好きであることが伝わってきた。日本語はとても上手で、コミュニケーションに支障がないほどであった。日本の文化も自分達が想像しているよりも多くを知っていて、しかもそれを好いてくれていることは日本人として嬉しく思った。対して私は K-POP が好きなくらいだし、韓国語も習い始めたばかりで話せないのも、少し自分を恥ずかしく思った。しかし、森山先生がセミナーが始まる前、韓国の学生には積極的に話しかけないと友達になることができないとおっしゃっていたので韓国語があまり理解できなくても、翻訳機に頼りながらではあるが積極的に話すように心がけた。韓国語がわからない分、会話の中で同徳の学生が使った韓国語の復唱をときどきしてみたのだが、同徳の学生は喜んでその韓国語の意味と発音の仕方を教えてくれた。韓国語は未熟でも話したいという意思を相手に伝えることで、より親密になれたのではないかと思う。また、討論において歴史問題の話になったときには、私が日韓関係に関する歴史やニュースについてあまり知らなかったのが、悔しかった。違う文化背景を持つ人と触れ合うとき、その文化背景についてある程度学習するのはマナーであると思う。その点は改善点であり、これからこのような機会のあるときに気をつけたい。

セミナー全般としては、濃い実習内容で本当に学びになった。実際に文化背景の違う人々と生活を共にし、何かを一緒に取り組むということは、異文化交流において非常に貴重な体験だと思う。このセミナーに尽力して下さった、森山先生、金晞泳先生には大変感謝している。改善点をあげるとすると、草津セミナーハウスは、次に利用する学生が不快に思わないようになっていれればいいと思う。また、最後に森山先生が韓国の歌を、金先生が日本の歌を歌ってくれて、楽しかったし嬉しかった。ただ金先生が日本語で歌ってくれていたら、もっと楽しかったかもしれないと思う。金先生は来年ぜひ日本語でお願いしたい。

日韓交流セミナーを通して

私たちのグループが今回のセミナーで取り上げたのは「文化を通しての日韓共生」である。現代において政治的・歴史的に対立する日韓両国であるが、音楽やドラマ、アニメ、漫画といった文化においては互いの国で受け入れられているものが非常に多い。そこで私たちは、政治的・歴史的な溝があってもそれを文化の力で乗り越え、日韓両国が互いに共生していけるのではないかと考えた。また共生のための一つとして日韓が共同で文化を世界に発信するという案が挙げられた。

取り上げたテーマを通じてわかったことは、文化を通して互いの国のイメージをプラスに変えていけるということ、またその反面で、文化といえど政治的・歴史的な問題と深い関わりを持っているということだ。韓国側との話し合いの中で「日本が歴史的な出来事に対する謝罪を行わない限り、文化的な共同は難しい」という韓国側の意見が挙げられた。この意見からやはり、韓国人は歴史問題を非常に重く受け止めていることを実感し、その反面、私自身や日本人の歴史問題に関する認識の薄さを強く感じた。

日韓の歴史認識の違いはやはり大きな壁となって両国の間に立ちほだかる。それは文化においても例外ではない。文化と政治的・歴史的な問題が深い関わりを持つ以上、文化による共生にとってこれらの問題が解決に向かうことは重要である。また、文化の交流や共同の文化発信のためには、日本人がより日韓の歴史問題に関する知識と関心を持ち、韓国側と歩み寄っていく必要があると感じる。しかし問題が解決しないからといって互いの文化の交流を停滞させるのではなく、問題解決と並行して文化の交流を続けていくことが日韓共生にとって重要であると考えます。

また今回のセミナーでは約1週間、韓国の学生と生活を共にすることで気づいた点が非常に多くある。まず韓国人の年上の方に対する態度である。韓国側の学生は自分より年上の学生のことを必ず「オンニ」と呼んでいた。この単語は日本語の「お姉さん」に該当する言葉だが、日本人は自らの実の姉以外の人のことをお姉さんと呼ぶ事は非常に珍しい。年上の人をこのように呼ぶ韓国の習慣は、儒教の国ならではの年上を重んじる一面であると感じた。また韓国の学生との間で、日本人と韓国人の話し方における特徴の違いが話題に挙げられた。日本人は説明が回りくどく、結論に至るまでが長い一方で、韓国人はそのような回りくどい説明はできるだけ避け、ストレートに結論を言うという違いがある。日本語と韓国語は文法や単語の音が似ているという共通点を持つ反面、このような違いがあることは非常に面白い。

同じ東アジアに属し、その見た目もあまり変わりはなく、そして使用言語に関しても類似点が多い両国だが、共に生活をして互いに違う面というのは少なからず存在した。このような微妙な差異を理解しあうことも、日韓共生に繋がるのではないかと感じる。

今回のセミナーで、直接韓国の学生から日本に対するイメージや歴史問題への憤りなど多くの話を聞くことができた。韓国人、しかも同年代の若者の気持ちを報道などを通じてではなく直接聞くことでより実感を持って感じられ、日韓関係を改善し、互いに共生していきたいと強く感じることができた。また生活を共にし、日韓の複雑な問題について互いに真剣に話し合うことで、国という壁を超えた友好的関係を気づくことができた。このような経験をさせてくれた今回の日韓交流セミナーは私にとって非常に有意義なものであったと言える。

友人たちから学んだこと

今回、一番学んだと思うことは韓国側の歴史認識問題の大きさについてだ。私たちは文化をテーマに選んでいた。私は、韓国について文化が好きになれば国も好きになるという安易な考え方をしていたのだが、同徳の学生は「日本文化は好きでも、日本は嫌いな人が多い。」という。「日本の民間人と政府とは違う。日本が好きかという問いは政府が表に立っているのだから嫌いという答えになる。」と。自分がいかに軽い認識だったかと思いついた。話をたくさんしていくうちに、日本は加害者であり被害者である国だということを感じた。被害者だと思っているから罪の意識は薄く、加害者だとしてもアメリカと同じように復興援助をしていけば友好関係を築けて当然と思っているのかもしれない。戦争に被害者も加害者もないという意見もあるが、少なくとも朝鮮という国を日本は蹂躪したことは事実だ。しかも、ほんの 70 年ほど前に。真摯に向き合わなければ心が離れるし、日本の政府を民間で変えなければならないのだと感じた。しかし、「文化」というものの大きさも感じた。同じアニメを見て同じ歌を聴き、育ったという事実は私たちの距離を急激に縮めたし、韓国も日本も関係なく歌の上手さや踊りについて語った。文化面からも近づき、政治面からも近づくというのは日本と韓国の未来を考えるとどちらも欠けてはいけないのだというのが今回のセミナーの私の結論だ。

言語的、文化的学びとしてグループ発表までの苦労を少し語りたい。今回私は「文化」をテーマにこのセミナーに臨んだのだが、韓国側と話しながらテーマを具体化させていこうとしたのが難しく、まとまるまでかなりの労力を要した。曖昧な概念は、同質な存在である日本の同じ大学の女子大生同士で理解されやすくても国や言語が違えば難しいものだと学んだ。また韓国の学生は気性が激しいと感じることはなかったのだが、言語的壁があるのではっきり話をした方が良いのだとも学んだ。単純な言葉で話すのは案外難しく、私はもっとシンプルに伝えられるのにな感じた。

セミナー全体を通し、施設面で同徳の友人たちが苦労をしていたのを多く見かけた。お風呂や施設の綺麗さは、人によっても違うが国によっては大きく違うらしい。韓国学生の要望をききつつ、今回は別の場所も考えると良いと思う。

日韓の交流から共生へ向けて

私のグループでは、日本人と韓国人が直接触れ合うことによる交流をテーマに発表を行った。前年度、韓国の学生とテレビ会議を通して日韓共生について討論する授業を履修した。私はそれまでメディアを通して見る韓国しか知らなかったが、日本語を学び、日韓が抱える問題や今後の共生に向けてしっかり自分自身の意見を持っている韓国の学生と議論をすることで、韓国に対する印象が良い意味で大きく変わった。この経験から、日韓共生において必要なことは、日本人と韓国人が交流を行い、そして対話をするのではないかと考えこのテーマを選んだ。

今回のセミナーの中での発表では、日韓交流を行っている団体や学校などの事例を取り上げながら、さらに日韓交流を促進させるためには何が必要かについて考えていった。事例を調べる中で、日韓交流が行われている地域や団体はあるけれども、その交流に継続性がないということが問題ではないかと考えた。しかし、浅草で行ったインタビュー調査の中で、日本人の学生と交流試合を行った韓国の学生から、日本に友達ができただけでまた日本を訪れたいという声を聴くことができた。このようなことから、交流を行う上で、ただお互いの文化を体験したりするだけではなく、交流を深めて友達を作ることが重要ではないかと感じた。はじめはどのように結論付けるかを悩んでいたが、セミナーを通して韓国の学生と交流を深めていく中で、政治や歴史問題とは切り離して、人と人との交流を大切にすることが必要であり、交流をしていく中でお互いの違いや共通点を理解することができるため、その結果日韓の共生に繋がると結論付けた。

韓国の学生との交流を通じて第一に感じたことは、日本語を学んでいるという理由もあるだろうが、日本に対してかなり好印象を抱いてくれているということだ。そして積極的に私たちと交流しようという姿勢を見せてくれたことがとても嬉しく思った。今回の日韓セミナーは日本で行われるということもあり、こちらがもてなす立場であった。日本人の場合、初対面の人とすぐに仲良くなるというのは難しいと感じる人も多いと思う。しかし、韓国の学生はまるで以前から友達だったかのように気軽に接してくれた。1週間という短い期間だったにもかかわらず、とても仲良くなることができたのは韓国の学生のおかげだと考える。また、日韓共生を考えるうえで日韓の文化の違いに焦点を当てて考えおり、日本と韓国の文化には大きな違いがあるという考えを持っていたが、共通している部分も多いということを感じた。まず、韓国語を勉強する中で、文法や単語が似ているため、韓国語がほとんどわからなくてもなんとなく何について話しているのかはわかることがあった。また、金先生が講演の中でお話されていたように、本音と建て前は日本特有ではなく、韓国でもよく使われるということもある。ファッションや食事などの文化の面では違いを感じるがあっても、一緒に話す分には日本人も韓国人もさほど差はないというように、このセミナーでの共同生活を通じて感じた。

このセミナーの中で、お互いの言語を使って発表し合うということが大きく意味のあるものだったと考える。韓国の学生が日本語を話すことができるためそれに甘えてしまう部分が多かったことで、韓国語をもっと勉強すべきだったと反省している。また、議論をする中で通訳が必要になる場面が多かったため、わかりやすい易しい日本語を使って議論を行うことの必要性を感じた。

近づいた日本と韓国との距離

私たちのグループは、日本と韓国が共生していくためには、直接交流の促進が必要であると考えた。国家、自治体、経済など、様々な主体が担う交流が存在しているが、歴史問題や政治問題によって、その交流が絶たれてしまう事もある。しかし、草の根レベルでの人対人の交流であれば、外部から交流を遮断されることはなく、個人の努力で深められ、継続して行うことができると推察した。第1次発表後、どのようにして日本や韓国にいる、直接交流に無関心な人の交流参加を促すかということについて、具体策を考えた。しかし、約1週間のセミナー中に行った、日本の観光地である浅草でのインタビューやグループ内の討論を重ねていく内に、無関心層の参加を促進するには、限界があることを感じた。私たちのグループの研究テーマは、直接交流だったため、自分たちが日韓セミナー中に実際に経験してみたことで、交流を促進させるためにはどうしたら良いかという問題の核心に迫ることができた。交流に関心のある人を増やそうとすることが重要なのではなく、交流に関心を持っている人が、これから先どのようにして交流を絶やさずに続けていくか、「好き」という気持ちをどのように深めていくかが課題なのだと思う。そして、交流をしてみた人が体験談を SNS で発信したり、周囲の人たちや将来の自分の子供に話したりすることで、その人たちが感じている日本と韓国との距離感を縮める役割を果たせるのだと考えた。日韓共生が実現するためには多少時間がかかるが、個人が多いに貢献できるのだと実感した。金喘泳先生の講演で、日本と韓国の両国には建前の文化が存在することを理解したことで、グループ内で建前のない、本音の付き合いをすることができたと思う。日韓セミナーで直接対面する前にパディとLINEで連絡を取り、少し話してみたが、どこか心の距離があったと感じずにはいられなかった。この原因の一つに、おそらく建前の上で話していたことがあるのかもしれない。また、第1次発表では韓国語で発表したのが、この経験は非常に意味のあるものだということが理解できた。相手の国の言語を使うことは、コミュニケーションを円滑に行うためだけでなく、相手がどんな言語を使って今まで生きてきたのかを知り、心の距離を縮めるためにも必要不可欠なことだとわかった。そして、発表前に当たり、パディでお互いに発表内容読んでもらい、録音した音声に基づいて練習したり、発音のチェックをしてもらったりして、協力しながら韓国語や日本語の発表技術を向上することができた。実際に経験してみて、世界共通言語である英語の運用技術を磨くことも大切だが、相手との心の距離を縮めるには相手の言語を学ぶことが最も良いことがわかった。第2次発表は日本語で行ったが、もっと準備する時間があれば、韓国語で発表することもいいかもしれない。韓国の学生に発音などを教えてもらって発表の練習をすることで、グループ内での絆がより深まると思う。また、韓国の学生たちと出会って間もない時は、ファッションや美容、入浴の習慣などの文化の違いばかりに気がつくことが多かった。しかし、寝食を共にしていくうちに、共通する点が多く見つかっていき、私たちがどのように違うのかという意識がなくなっていったように感じた。異なる点を見つけることは簡単だが、共通点を見つけるためには共に過ごす時間が必要であるとわかった。

日韓セミナーを終えて、今まで距離があるように感じた韓国がかなり近く感じるようになった。そして、ここでの交流を絶やさず、彼女たちとの距離をより近く感じてみたいと感じた。今回、頼もしい先輩方に支えていただき、非常に充実した実習にすることができた。私も成長して、再び日韓セミナーに参加するときには先輩のように振る舞い、セミナーをさらに良くすることができるようになりたいと思う。

日韓の直接交流の場がもたらしたものは

私のグループの研究テーマは、主に「直接交流」についてであった。メディアなどによる間接的なアプローチではなく、直接韓国人と交流することでできる日韓共生を考えていくというものである。このセミナーに参加すること自体が直接交流であり、実践的に研究テーマについて考えることができた。この研究の中で印象的だったのが、韓国人観光客へのインタビューでのことである。継続的な日韓交流を行う方法を探るべく、再び日本に訪れたいかを伺った際に、日本に対するイメージがあまり良くなく、もう一度日本に来たいと思わないと答えた方がいたのだった。その原因は、日本人の友達ができなかったからではと推測し、直接交流を促進するには現地の友達の存在が必要であり、そのためには共通言語があることが非常に重要だということを知った。私は、日韓セミナーを通して、韓国人の友達ができた。それも、今まで知り合ってきた様々な外国人の中で、もっとも仲が良く、外国人という感覚なしに、心の通じ合う最高の友達といえる。これが実現できたのは、韓国人側が日本語を話すことができたことが大きく関係しているということだ。日本のことが好きで、日本語を一生懸命学んでくれたからこそ起こりえた友情であり、私は、言葉が通じるということの重要性を痛感したのである。今回の日韓セミナーの中で、自分自身も韓国語が話せたならば、お互いより深いところまで話すことができたに違いない、と後悔する場面も多々あった。共に理解できる言語がなければ、交流すること自体が難しくなるわけであり、国際交流というものを世界全体で考えると、世界共通語である英語を学ぶことがいかに大切かということを知ったのだった。

また、今回の韓国人との交流に関して、言語面も文化面も、日本と韓国で似ている点が非常に多いということも学んだ。もともと言葉も文化も、同じ中国から取り入れられたという歴史が関係していると思うが、日本語と似ている韓国語も多いし、韓国人は日本人と、価値観や考え方、さらには味覚も似ているとも感じた。特に、日本特有だと思っていた「本音」と「建前」の使い分けを韓国人も自然にしていた点は、私にとって驚きだった。美意識の高さなど、カルチャーショックを受ける部分もちろんあったが、予想していたよりも日韓の共通点が多く、親近感が湧いた。

セミナー全般を通して、グループ間の交流がほとんどなかったため、他のグループの韓国人と話すチャンスが少なかったのが少し残念であった。しかし、むしろ自分のグループと一緒にいる時間が長かったため、よりグループ内の仲が深まることにつながったのかもしれないと思う。そして、一週間ただディスカッションを通して交流するのではなく、このセミナーでは、寝食をも共に過ごすというところが、非常に良かったと思う。節々で文化の相違に気づくこともできたし、何気ない会話から得た新たな発見が多かった。このような点で、このセミナーの、ある一定の期間を一緒に生活して過ごすというところに、大きな意味があったのではないかと思うのだ。

正直初めは、韓国に対する関心があまりなく、このセミナーに参加するかどうか迷ったほどだった。しかし、参加したことで、自分の韓国人に対するイメージが一気にプラスへと転換したのである。参加するという決断をして、本当に良かったと今振り返ってみて思う。そして、このような日韓の直接交流の場を与えてくださった森山先生に感謝したい。私は、自分のように、ほんの少しのきっかけがその後に大きな影響を与えるのだということを実感した。これほどに簡単に考え方は変わるのであれば、今後このような日韓交流の場、交流するチャンスを増やしていくことで、日韓共生は将来的に実現できると確信したのである。

直接交流から日韓共生へ

研究、討論、発表を通して学んだことは、3つある。まず1つ目に、観光という短い期間の中でも、多くの方が、直接交流を望んでいるということである。私たちは、第2次発表に向けて、浅草にいる韓国人旅行者にインタビューを取った。すると、14人中12人が、日本人と直接交流を求めている。とりわけ、サッカーの親善試合に参加するために来日していた小学生は、日本人の友達を作れなかったことをとても悔いていて、「友達を作るためにまた日本に来たい。」と言っていた。そして2つ目に、直接交流のもたらす影響力は、とても大きいということである。私たちは、直接交流の成果を確かめるために、去年の日韓フォーラムに参加したお茶大生にアンケート調査をした。初め、私たちは、彼女たちは、もともと韓国人との直接交流に興味を抱いている人が多いために、調査対象者として不適切なのではないかと感じていた。しかし、5人にアンケートをした結果、意外にも、親の反対を押し切って行ったという参加者や政治的に悪いイメージがあったという参加者がいた。そして、この2人は、このフォーラムを通して、見事に韓国に対する感情が大きくプラスへ動いたという成果が挙げられた。また、浅草でのインタビュー調査で出会った、20回も来日しているという50代の韓国人男性の観光客は、日本各地に友達がいることが、何度も通う理由であると述べた。そして3つ目に、若い世代において、反日・反韓感情を抱いている人は少ないということである。第1次発表に向けて、新大久保の日本人と韓国人が互いに一対一言語を教えあう交流の場で、20代の韓国人男性に話を聞いた際、「自分の周りで、反日感情を抱いている人は、少ない。」と述べていた。また、反日感情を抱いている人に対してどう思うかという質問には、「反日感情を抱いている人の多くは、年配の方であり、彼らは、もうすぐ死んでしまう。だから、僕たち若い世代が、反日・反韓を抱いていないことは、とても大きな意味を持ち、未来は明るい。」と言っていた。確かに、その通りだと思う。教育の現場やメディアでは、依然として譲らない姿勢があるのが現状であるが、幸いにも、私たち若い世代が直接交流に興味を抱ききっかけは、身近にたくさん転がっている。

文化的学びとしては、大きく2つのことがある。まず1つ目に、日本の「もったいない精神」がいかに強いということである。韓国人学生と食事を共にする中で、日本人学生は全員完食する一方で、韓国人学生は残すことが多く、初めは抵抗を感じた。しかしながら、徐々に「残しても良いんだ。」と私自身、気持ち楽になっていったのが分かった。そして2つ目に、韓国人はお風呂を友達と入ることに抵抗を感じるということである。私が、「一緒にお風呂でお話ししようね。」と言ったとき、韓国人学生が驚いた顔をした。韓国ではあまり友達同士の裸を見たくないのだそうだ。それを聞き、きっとお風呂は別々に入ることになるのだろうと思っていたのだが、実際は、韓国人学生が、私の隣のシャワーを使い、一緒に湯船に入り、常に話かけてきてくれた。私の文化に自然と歩み寄ってきてくれたことが、とても嬉しく、感激したのを覚えている。

セミナーの良い点としては、大きく3つある。1つ目に、韓国人学生の日本語力がとても高く、とてもコミュニケーションを取りやすかったことである。2つ目に、班の仕事の割り振りが、仲を深める契機となったことである。そして3つ目に、自由時間がたくさんあったことである。

たった1週間の経験が、ここまで強い絆に繋がるとは思ってもみなかった。日本語を勉強し、セミナーに参加してくれた韓国人学生に大いに感謝している。

セミナーを通しての多面的な学び

一般的に「女性に優しい国」というイメージが定着している韓国とのセミナーだったので、この機会にぜひともジェンダーの問題を取り上げたいと考えた。第一次発表以前のわたしの予想では、ジェンダー問題については韓国の方が先進的で解決しつつあるのではないかと考えていた。しかし実際には、韓国でも日本と同じような状況が広がっていることが分かった。我々は「育児休暇」という観点からジェンダー問題について検討したが、両国で育児休暇を取り難い雰囲気や環境があるということが、最も難しく最も根本的な共通の課題として挙げた。それにより育児休暇を取得できず、職場から離れてしまう女性が多い。「職場の雰囲気が育児休暇を取りにくくする」という状況が、日本以外にも存在していることを初めて知り、日本独特の問題だと考えていたわたしは少し驚きもした。しかし両国において同じような課題が見つかったが、韓国においては育児休暇取得後に同じ職場に復帰しやすくするための制度がみられる企業があった。これは、わたしたち日本側の学生だけでは出なかった新たな知識でとても興味深かった。自国のみではないような事例や発想に触れることができ、出身国が違う人と討論することの面白さを感じることができた。

今回のセミナーは6泊7日で行われ、今までこれほど長く出身国が違う方と寝食を共にしながら交流する機会がなかったので、少し不安も抱えながらのスタートだった。しかし実際の交流では、国や文化の違いを意識せず1人の友達として接することができている自分に驚き、国を超えた交流に対するハードルが大きく下がると共に、友達ができることでその国の印象が大きく変わるといっても改めて体感できた。生活を共に長く関わるからこそ見えてくるお互いの文化の違いもあったが、それらも学びや興味として受け入れることができた。また、言語的学びとして第1次発表を韓国語で行ったことの重要性は、このセミナーを通してとても高いのではないと思う。母国語でもなく、第一外国語でもない言語で発表することの難しさは言うまでもなかったが、とても貴重な経験になり今まで学んだことのなかった言語に挑戦する機会にもなった。また第1次発表時だけでなく、その後の交流への影響もとても大きかったように感じる。交流において、異国の友達が自国の言語の単語を少し発音してくれるだけでも親近感が湧くことがあるが、今回韓国の友達と話していても相手の表情からそれをうかがうことができ、より親密度が増したように感じた。会話でも、「韓国語での言い方」や「日本語での言い方」を聞き合ったりハングルの読み方を確認してもらったりという内容で話をすることができたことも、第一次発表のためにハングルを多少なりとも勉強していたからであったと思う。

セミナー全体として、とても多方面における学びの多い7日間になったと思う。発表を通しての学びだけでなく、グループごとの交流の時間も大変多く設定されていたため、文化的な学びや言語的学びもあり、様々な観点から韓国学生との交流を図れた。改善点としては、より多く第2次発表の時間を設けてほしいということだ。現地に行ってから状況により予定変更となり、以上に短くなってしまったこともあるが、「準備時間」として設定されていた時間が非常に短く感じた。話し合う内容自体はとても深いものとなり深夜にも及び、白熱した議論が行われていた瞬間もあったが、最終的には時間も気にしながらのまとめとなってしまい少し残念にも感じた。来年以降の改善策として、グループでの交流の時間もとても重要だが、それだけではなく日常ではなかなか機会が設けられないテーマに対する討論や発表準備の時間を、もう少し多く設けてほしいと思う。

セミナーでの学び

私たちのグループはジェンダーを一つの大きなテーマとし、第1次発表では日韓両国の育児休暇関連制度についてそれぞれ発表した。日本側の現状としては、それら制度の認知度の低さが大きな問題としてあがっていたが、発表準備の過程において、私自身も初めて耳にする制度が多く他人事ではないと感じた。社会に出る前に、こうした制度の存在や利用法を知ることができたこと、また他の学生にも発表を通して知ってもらえたことは意義のあることだと感じる。また、この発表は半年間学んできた韓国語で行った。一人当たりたった2分の発表ではあると言え、初めて第二外国語で発表をするという経験を通して、発音や早く話すことの難しさを感じた。しかしこれらの経験から、その後の韓国の学生との交流の中で、簡単な日本語を使う、ゆっくり話すなど、相手により寄り添った会話ができただのではないと思う。韓国の学生と共同で行った第2次発表では、日韓両国の共通の課題として、制度を利用しにくい職場の雰囲気や、その根本的解決のため管理職の女性割合を増やすための施策を考えた。テーマに関する語彙に難しいものもあり、最初は議論がどうしても日本人中心になってしまっていたが、このままではいけないと話し合っ、グループをさらに二つに分け、より少人数で議論を行うことにした。そこでは韓国の学生もより多く意見を出してくれるようになったが、やはり内容はかなり難しいものであり、交換留学生に通訳してもらってやっと双方の合意が取れるような状態であった。ジェンダーを選んだことに関しては、どちらも女子大学ということもあり馴染みのあるテーマでよかったと思うが、そこからさらに絞り込む際には、相手の語学力に応じて、自分の考えを話しやすいテーマにするなどの工夫をすることで、よりお互いが納得のいく議論ができたのではないと思う。

今回のセミナーは、昨冬に開催された日韓フォーラムに続いて、私にとって二回目の日韓交流だった。セミナーを終えて、前回よりもより充実していたと思えるのは、一人のボディと長い時間一緒に過ごしたことが大きいと思う。前回のフォーラムでは3大学を訪れたため一つの大学で交流する時間は短かったが、今回は一週間を通して同じボディ・グループで活動した。日本人同士の交流では1日2日あればある程度打ち解けることができると思うが、言葉や文化の壁がある間柄では、より長い時間が必要であると感じた。時間はかかっても、よりお互いのことを知ることができ、その後の関係性はより強固で良いもの、友人と呼ぶのにふさわしい関係となったように感じる。また、寝食をともにしたことも重要だったのではないだろうか。フォーラムではホテルでの滞在だったが、今回は同じ部屋で寝泊まりし、食事の準備や入浴など常に生活をともにした。共同生活の中では、「違い」を見つけ否定的に捉えてしまいそうになることもあるのだが、その都度それを乗り越えようと努力し、より広い視野を持ち、相手の文化に理解を示すことができるようになっていく自分に気がついた。こうした親密な交流を通して築かれた関係は、これからは維持していきたいと強く思えるものとなり、また韓国を訪れたいという気持ちにも繋がっている。SNSなど、遠く離れて暮らしていても相手の近況を知ることのできるツールがたくさんある。それらをうまく活用しながら、そして時には互いの国を行き来しながら、このセミナーでできた友人との関係を大切に続けていきたい。

初めての日韓交流

今回の日韓セミナーは私にとって初めての日韓交流となった。今まで韓国人とは留学生や観光客としては関わりがあったが、長期的に交流したことはなかった。一週間という期間を共に生活することで短期的な交流では見えてこなかった韓国の文化を知ることができた。

私が一番印象に残ったことは韓国が超学歴社会ということだ。学校が終わるとほとんどの生徒が塾に行き夜の11時まで勉強をするそうだ。高校生までは受験勉強に専念するため容姿を気にすることはあまりなく、大学生になるとストレスからの開放感などから急激に痩せる人も多いそうだ。前にお茶の水女子大の韓国人の留学生が「日本の文化祭などで青春したい」と言っていることを思い出した。おそらく彼女も勉強一色の学生生活を送り、日本の学校で行われている催し事に憧れを抱いていたのだろう。学歴社会だと受験に失敗した時の社会的ダメージが大きく、貧困層は社会からの疎外感をより一層感じるのではないだろうか。この気づきは韓国の学歴社会と学生の幸福度の関係性について考える機会となり、関心を持つきっかけとなった。多くの韓国人学生と交流し、韓国の学歴社会と勉強、学校生活のあり方についての考えを聞いてみたいと感じた。

韓国人学生とのテーマ研究では女性の社会進出に関して討論し、日韓共に同じ課題がみられた。女性の育児休暇の所得率や管理職の割合など、いまだ十分な数値とは言えず、両国ともに女性の働きやすい社会に向けて政策を掲げているものの、成果を挙げられているとは言い難い。韓国では企業が女性の在宅勤務推進のために社宅や新しい職場を設けるなどの対策が見られたが大手企業にしかできない対応であり、中小企業にもできる対応ではない。社会全体の女性活躍には一部の大企業だけの対策は不十分である。そのためには政府の対策が必要不可欠であり、具体的な数値目標に向かって成果をあげて欲しいと考える。女性の働きやすい環境をつくり、日韓共に東アジア共同体の先導を歩んで欲しいと考える。

セミナー全体で一番印象に残ったことは韓国語での第1次発表だった。私は4月から韓国語を勉強し始めたため、韓国語での発表に大きな壁を感じていた。最初はカタカナで書かれた振り仮名を読めばいいだけだと思っていたが、お茶の水女子大の授業内での発表を聞くと、もっと上手な韓国語で発表したいという感情が出てきた。第1次発表の前日に韓国人の学生に夜遅くまで自分の韓国語をみてもらったことはとてもいい経験になり、大学生になって本気になれたことの1つとなった。そして、私が韓国語のアプリをダウンロードして勉強していることを褒めてくれたり、韓国語の質問に丁寧に答えてくれたりする韓国人学生がとても勉強の支えとなった。セミナー中に新しい言葉を日に日に覚えて使うことが楽しかった。私の韓国語の勉強を支えてくれた班のメンバーにとっても感謝したい。

このセミナーで、韓国の社会問題や文化について多くのことを知ることができた。そのほか、日本語を勉強している学生に日本語を教える楽しさや、母国語以外の言語を学ぶ楽しさも知ることができた。韓国人学生と共に生活を送り共同作業をすることによって信頼が築き上げられ普段話さないような深い話まですることができた。このセミナーで終わりでなく、韓国に行く時、日本に来る時に再び会う関係でありたいと思う。

日韓セミナーを終えて

今回のセミナーで、私たちのグループは「女性の社会進出」について研究、討論、発表を行った。このテーマが日本と韓国で共通の課題であることを、私はこのセミナーに参加するまで知らなかった。女性問題のみならず、韓国が抱えている問題についてほとんど何も知らない状態であったということにすら気が付かないほどだった。テレビや新聞で毎日のように日韓関係についての報道があっても、実際にどんな国なのか、どんな文化があるのか、国内で起きている問題は何なのか、日本に対する印象はどうか、何も知らずにいたということに気づけただけでも、このセミナーに参加した意義があったと思う。そして、自分たちのグループが取り上げたテーマについてはもちろん、他のグループの発表によって日本と韓国とがどうして良好な関係を築けていないのかを部分的にでも知ることが出来た。その中で複数のテーマに於いて問題となっていたのが歴史問題についてである。具体的に双方の歴史認識について教科書を例に取り上げたグループがあったが、そのグループだけでなく、文化交流をテーマにしていたグループでも同様の問題が挙げられていた。たいていの日本人が思っているよりも、韓国人にとっての歴史問題というのは重要なものであるのだと強く感じ、同時に日本でもっと真剣に現在の問題として取り上げられるべきであると感じた。日本では「原爆を落とされた、敗戦国である」ことが被害者意識に繋がっており、自国が侵略者であり加害者であったことにあまり意識を向けていないように思う。片方にとって進行中の問題について過去のものとして真摯に向き合わない態度のままでは、どうやっても根本的な共生、良好な関係性の構築は不可能だろう。韓国の学生から直接意見を聞くことによって日本側からの視点以外の視点を持つことが出来たことはセミナーの大きな収穫の一つであった。

「女性の社会進出」について、第1次発表では特に育児休暇について、第2次発表では女性管理職を増やすためにどうしたらよいか、育児と両立して女性がキャリアアップしていくための働き方について考えた。討論の中で私が一番印象に残っているのは韓国の学生から出た、「女性のための政策を実施しようとしても、男性からの「逆差別である」という反対意見によって十分に実現されない」という現状だった。組織の上層部に女性が少ないことで女性支援策が実を結ばないという事実と同時に、朴大統領が就任してから女性政策が減速したという事実があることも興味深いことだ。国の代表が女性であってもかならずしも女性政策が加速するわけではないのはどうしてだろうか。私たちは管理職に女性が増えれば、女性の意見も通りやすくなり、女性の就労環境を改善する施策が行われやすくなるのではないかと考え発表したが、国のトップが女性である韓国の状況から、単純に数が増えること、高い地位に女性が就くことだけが女性問題改善だとはいえない。この点についてセミナー内ではあまり掘り下げることが出来なかったのが残念である。

7日間の交流で、「韓国では」「日本では」という話題が多く会話に上った。確かに異なることはいくつもあり、国が違うと文化や考え方が違うのだと感じたが、日本でも韓国でも変わらないこともたくさんあった。固定観念で「韓国人はこう思うだろう」、もっといえば「外国人はこう思うはずだ」と思い込んで接していた部分があったのだと、交流をしていくうちに気づいた。国や言語、文化が違うということはとても大きなことに思え、実際に大きな壁ともなるが、そんなことは関係なく繋がりを持つことは可能だということ、韓国人学生たちと交流して学ぶことが出来た。

日韓関係の成長、私の成長

私は5班で、女性の社会進出を促進する日韓の制度を調べ、今後、両国が進むべき道について討論を行った。調査を通じて、日韓は世界的な経済規模でありながらも、深刻な性差別問題を抱えていることが分かった。最初に私は、男女平等指数が高い北欧の政策を調べた。しかし、福祉国家の北欧と韓国の文化や国民の情緒は全然違い、彼らの政策をすぐ韓国に導入するのは難しいと思った。韓国の性差別の背後には儒教の影響で形成された家父長制と、長い間東アジアを支配してきた男性中心的文化がある。そして、このような文化的背景は日本も共有している。このように日韓は同じ文化圏であり、同じ問題を共有しているため、お互いの成功事例は受け入れ、失敗事例はともに反省し、より現実的で良い代案を出すことができた。現在韓国と日本の間には政治的、歴史的認識の「違い」による争いが絶えない。しかし、日韓が共有する「同じ」文化に着目するならば、一緒に抱えている問題をより効率的に解決できることが分かった。今回のセミナーではどのようにジェンダーステレオタイプを越え、女性の社会進出を促進していくかについて、文化的に近い両国の動きを比較し、共に考えながら、今後日韓が進むべき道を模索することができた。

また私はセミナーの準備期間、日本人の友達が韓国語の原稿を読めるようになるため、発音の練習を手伝った。ところが、発音の練習中に、日本人の友達から「どうしてこのハングルはこう発音するのですか」（パッチムのため発音が変わったところだった）という質問を受けた。私はうまく説明できなかった。韓国人である私は昔から発音の変化に慣れていたためだ。日常的には、どのような文法規則によって発音が変化するのか考えた上でハングルを読むことはしない。私には当然な韓国の言語と文化が外国人には当然ではないということに改めて感じた。一方で、歴史・政治的認識も同じだと思った。昔、歴史と政治をテーマに調査を行ったが、韓国人である私には当然な考え方が彼らとは対立し、腹が立った時があった。しかし、このような認識の差も違う国家の違う環境で育ってきたため、自然と発生するのだ。従って、感情的に対応するよりは対話を通じて認識の差を狭めていく態度が必要だろう。この「発音」事件を通じて、良い交流のためには相手の立場で私の国の言語と文化を考え直し、積極的に説明しなければならないと思った。

最後に、今回のセミナーは、日本語を学ぶ学習者として言語の勉強における大きなモチベーションになった。私は今回の交流では日本側に所属していた。それで日本側と韓国側の討論がスムーズに進められるように通・翻訳をするなどの「橋」の役割を果たそうとした。両国で長い期間準備してきた資料を伝えながら、両国の学生が交流をし、良い政策を模索することに私が役立っている気がして嬉しかった。事実、韓国の大学では言語及び人文系の学科の人气があまり高くない。ほかの学科に比べて就職が難しいということがその理由だ。私も一時、「外国語がうまい人はいっぱいいるから、私はいくら学んでも無駄だ」と外国語の勉強に悲観的な考えをしたことがある。しかし、セミナーで日本語を使って通・翻訳をしながら交流に役に立つ経験をすることで、外国語学習が意味のあることだと気づいた。また、両国の学生と日韓共通の問題の解決策を探しながら、外国語の学習が交流の扉を開き、有用性を生み出せることにも気づくことができた。

日韓セミナーをとおして

私は今回のセミナーには学生委員として参加したため、テーマ研究は行わなかった。そのため印象に残った2班の発表について考えたことを書きたいと思う。2班は「日韓の未来と歴史教育」というテーマのもと第1次発表ではアンケート調査によって日韓の歴史認識の違いをまとめていた。ここで話題に上った安重根について、韓国の人気アイドルが安重根の顔を見ても誰か分からなかったために、ひどくバッシングを受け韓国の広報大使から除外されたということを知った。韓国の人から彼はどれだけ英雄として考えられているのかということが簡単に想像できた。日本だったら、ただのおバカ扱いされるだけだと思ったからだ。第2次発表では日韓の歴史教科書の記述内容の比較をしていた。加害国―被害国の関係で違いが出るのは当然のことである。私たちは教科書をうのみにせず隣国との政治・歴史関係に興味をもつことが大事だと感じた。無関心な人がネットの意見に影響を受けやすいのだと思う。複数の班の発表の中で、日本に対する印象で日本政府は嫌いだけ国民は好きだ、政府と国民は違うというコメントが何度か出ていて必ずしも反日は私たち個人に向けられるものではないということで、彼らは冷静に日韓関係を捉えているなど感じた。日本側の韓国に対する印象ではこのようなコメントはでるのか興味をもった。

私は昨年冬の日韓国際学生フォーラムに参加した。韓国人学生との交流はそれが初めての体験であり、私は悔いが残ることがあった。そして、今回は積極的に交流しようとしてみた。前回の交流との大きな違いは寝食を共に一週間過ごしたことだ。実際、このことによって一緒にいるときは猫かぶりするということもなく、素の状態できちんと付き合うことができたため私達の仲はより親密になることができた。実行委員には日本語学科でない人もいたが、どの人も日本の文化や日本が好きで、会話をしているととても楽しかった。前回は、交流において言語の壁を感じてしまったが、今回の交流ではもっと韓国語が話せたらと思うことはあっても、ときにアプリを使いながら会話を楽しむことができた。相手がこれ日本語でなんとと言うのと聞いて来たら、反対に私も韓国語ではなんとと言うのと聞き返し言語の教えあいをすることができた。パディとはいろいろな話をしたが、日本の友達同士ではない話題がとても新鮮に感じた。宗教の話や軍隊の話、一緒に生活することで見えてくる文化の違いについてなど話題が尽きることはなかった。

今回私は学生委員という立場で、事前のテレビ会議での進行やセミナーの日程の打ち合わせといった、ただセミナーに参加するだけではできない貴重な経験をすることができた。学生の意見がとおりやすく、学生主体でセミナーをつくっていくのが良かったと思う。しかし、学生委員としての仕事がスケジュール作りや担当のグループと情報共有など事前の仕事が多かったため、セミナー中に自分たちがやるのが少なく手ごたえを感じることはできなかった。実行委員という制度はとてもいいと思うが、ほかの人と同じく発表を課すべきだと思う。実際、パンフレットづくりや食事配膳などは各グループの仕事であるのだから、あまり負担ではないはずである。また、議論が白熱するあまり自分の言いたいことが多すぎて長々と自国の言語で話して、森山先生や金先生の通訳を介さないとディスカッションが成り立たないことがあった。日本側が韓国語発表をするとはいえ、セミナー中の言語の割合はほとんどが日本語である。母国語ではない言葉で意思疎通をしようとしてくれている彼女らに対してもう少し配慮し、易しい言葉のチョイスをすることが大切だと思う。

第11回日韓セミナーを通じて ～直接交流からの学び～

私は実行委員だったので、グループディスカッションやテーマに沿った研究はしなかったが、他の班の発表を聞いて考えたことについて述べたい。私は去年もこのセミナーに参加して日韓共通の問題である女性の社会進出について研究したため、今年も同じ内容について研究していた5班の発表に興味をわいた。日本も韓国も、ジェンダー平等は法的にも国民の意識においても遅れている。また制度を整えても、それを執行する側の意識やその制度が適切に使用されているかを監督する制度もまだ十分ではない。女性も男性も「家事、育児は女性がするもの」という意識をいまだに強く持っているのかもしれない。5班の第2次発表の際の質問でもあったように、育児と仕事の両立という女性ばかりがフォーカスされ、男性へのアプローチが少なかったり、男性に目が向けられていなかったりする。男性という視点からジェンダー平等について考える必要があるのではないかと感じた。

交流を通じて感じたことは、言語的な面では日本人がもっと韓国の学生に「伝えよう」という意識を持つべきだったということだ。私自身、韓国の学生が日本語を話すことができるという状況に甘え、相手の立場にたって伝えるという姿勢が十分ではなかった。通訳を必要としないわかりやすい日本語で話すことや、誤解を招かないように伝えるということの難しさを感じた。また文化的な面では、韓国の学生は非常に明るく、自分の意見を相手にはっきり主張するということが驚いた。野外実習の時など、皆それぞれが「私はここに行きたい、これがしたい」と自分のやりたいことを伝えてくれた。日本人の場合だと「私は何でもいいよ、皆が行きたいところでいいよ」と周りについつい合わせてしまうが、韓国の学生は自分の意見を伝えてくれるので、それが実行できた時は「本当に喜んでくれているのだな」と案内する方の私たち日本人も嬉しくなった。

情報が溢れる現代、何が正しくて何が間違っているかという判断は難しい。さらに歴史問題など、教科書に書かれていることが必ずしも正しいとは限らない。そのような状況でも、寝食を共にして直接交流することでステレオタイプや偏見を打ち壊すことができると学んだ。自分の物差しで相手を決めつけていた思考の枠組みを交流によって少しずつ広げていくことが重要だ。草の根的な活動ではあるが、そういった小さな出会いや発見を積み重ねることが共生への第一歩になると感じた。

今回のセミナーでは、学生実行委員という役職があったために学生主体のセミナーになった点が良かったと思う。学生実行委員をやってみて、事前準備の際の韓国側と日本側の意見をすり合わせることに難しいと感じた。言語的な壁も物理的な距離もあるので、スケジュールの調整やコミュニケーションをとるのが大変だった。意見がすれ違っていることにそもそも気づけなかったり、伝えたいことが伝わらなかったりするなど、全体の進行を調整することは難しかったが、非常に貴重な経験になったと思う。

改善点としては、実行委員もグループの研究や発表に携わることができたらさらに良かったと思う。セミナーでは、ディスカッションをすることで日韓の意見の相違や、コミュニケーションの難しさを経験すると思うが、そうすることでより交流の質を高めることができる。参加者全員が研究やディスカッションを行うとより充実したセミナーになったのではないと思う。

「共に生きる」を目指して

「共に生きる」という言葉をテーマに開催された今回のセミナーは、日韓のより良い未来のために、お茶の水女子大学、同徳女子大学の学生が深い交流をし、そして積極的に意見を出し合った最高のセミナーとなった。私は、昨年実施された第10回のセミナー、日韓フォーラムに続き3度目の韓国の学生との交流となり、今回のセミナーでは実行委員を務めた。私自身は発表をしていないため、各班の発表やグループのメンバーとの交流を通して感じたことを踏まえて、本稿を記したい。

各班の発表では3班と4班の最終発表が印象に残っている。3班の発表の中で、日本のアニメ作品である「風立ちぬ」のことが言及されていた。韓国にもジブリ映画のファンは多いが、本作が制作された際は多くのファンが失望したという。日本において本作は感動作としてとらえられていたが、他国においては違った見方をされたこと自体を知らなかった自分を恥じた。森山先生が「日本人が歴史に対して無頓着であるから、文化面においても歴史認識に関して韓国側が言及せざるを得ないという面があることを理解しなければならぬ」ということを話していたが、この点を理解することは日韓が手を取り合って共生するためには重要なことであると感じた。表現の自由の観点から、難しい面もあるだろうが、「この表現をすると他国の人々はどうか考えるか」という視点を持つことは、共生のためには大切なことであることに気付かされた。4班の発表では、日韓の交流促進のために必要なことが言及されていたが、その中でも「友達を作ることが大事」という言葉は、まさにその通りだと感じる。私自身、なぜまた「韓国を訪れたい」と思うのか考えてみると、やはり「韓国にいる友達に会いたい」からなのである。これまで韓国以外の国にも訪れたことはあるが、その国では観光だけをして、友達ができた訳でもなく、正直1回行って満足してしまった面は否めない。日本と韓国は、すぐ行き来できる国なのであるから、「また来たい」と思ってもらえるような「友達を作る」取り組みは、共生のための重要な手段であると感じた。

グループでの交流を通しては、結婚観や子育てに関する話題が印象に残っているため、ここで記したいと思う。グループのメンバーである同徳女子大学の学生は、韓国では「結婚したくない」と考える若者が増えていて話していた。それは、子育ての金銭的負担が重いという点と韓国における詰め込み教育を自分の子どもにさせたくないという考えからだという。日本では、「結婚はしたいけれど、できない（相手がいない）」という面が強い。近年は結婚を促進するためのマッチングイベントなども話題となっており、この日韓の違いは興味深かった。また、その同徳女子大学の学生は、韓国における徴兵制が、ジェンダー観に影響を及ぼしているということも話していた。（簡単にいえば、「男は軍隊に行く点、女より偉い」という考え。）日本の女性も韓国の女性も「働き続けたい」と考える者が増えている点は共通であるが、そこで生じるジェンダーの問題に影響を与える事象は、日韓で違う面も共通している面もあり、機会があれば文献等で調べてみたいと感じた。

セミナーに関しては、宿泊施設に関しては、学生からも苦情が多かったため、今後日本でセミナーが開催される場合は、新たな宿泊施設の検討を願う。また今回初めて設けた実行委員は学生主体のセミナーという色を濃くし、また日韓双方の学生に対し情報を円滑に伝達できるという点においても今後も設けることを望むが、一方で実行委員の仕事としてはセミナー前が中心であるため、次回以降は実行委員も発表に参加するのも良いのではないかと考える。最後に、今後も多くの学生が日韓セミナーに参加することを通し、かけがいのない経験をして欲しいと強く願う。

私の初めての日本

初めて日本へ行くことになったのでわくわくしていたが、同時に怖くも感じた。実際に日本に到着して、私が感じた日本というものは韓国と似ているところもあったが、異なっているところも多かった。交通費が思ったより高く驚いた。

建物のデザイン、構造で韓国とは違う雰囲気が感じられた。

アニメで見た道や地下鉄が実際にあった。

いざ他国を旅行して回ることを考えたら、なぜか怖くて一人旅はまた次の機会にしようと思った。今度は日本各地を自分で探検してみようという決意もした。

「日本の遺跡を訪ねて、公園などもぜひ行ってみなきゃ！」

セミナーの準備をしながら、日本のいろんな所に行った。

日本の大きな神社の明治神宮、人が多い原宿、コリアタウンである新大久保、天然の温泉がわいてくる草津、江戸の姿を現在まで残してある恵子の町である川越、全部印象深かった。

10日間という期間は、日本の全部の姿を知るには短すぎる時間だったが、日本に対し、様々な興味が湧いて、関心を持つには十分な時間だった。

旅行にはおいしい食べ物や特産品、その土地の歴史を知ることが欠かせない。

納豆と天ぷら、そして醤油に漬けた、甘く塩辛い食べ物はすぐに適応できた。のりは本当に美味しかった。

セミナーで浴衣についてどういうものなのかを知り、実際に着付けを体験してみる時間はとても有益だった。日本の文化と言語もバディたちと一緒に時間を過ごすことで、自然に学ぶことができた。大学生という同じくらいの年のバディとおしゃべりをする事ができて、おもしろさが増した。(新しく知った単語「ヤバイ」、飲み会ゲームの風船ゲームなど)

私の場合、日本語があまり上手ではなかったため、私とバディの間に時々コミュニケーションの壁が生まれてしまったが、私のバディである恵子はかなり上手に私の話すことを聞き取ってくれて、ありがたかった。

最後に日韓問題について話すと、お互いの良い部分と誤った部分は尊重して認めなければならぬ。そのためには、先に自国の歴史をちゃんと知って、両国の文化を理解する努力が必要だ。今もまだ韓国人と日本人は偏見と誤解を持っている。

新大久保と東部二村洞で韓国人と日本人同士の交流があまりなかったという調査結果が、これを裏付けている。歴史を歪曲してはならず、それを誇りに思っ、恥ずかしい歴史をすべてそのまま受け入れてこそ、今後の韓日交流を友好的に進めることができると思う。

あえて一つ望むことがあるとしたら、セミナーの期間中にお茶の水女子大学の寮などで生活してみたかった。

今回のセミナーはとても忙しかったが、楽しかったし良かったと言いたい。

個人レポートの題目

8月2日から始まって約1週間行われた日韓セミナーは無事に終わった。9泊10日間日本で過ごしながらか、想像していたよりも多くのことを学んだ。私たち1班は、第1次発表では新大久保と東部二村洞を中心にして「街の中で韓国人と日本人はうまく共生しているか」を発表し、第2次発表ではこれについてさらに話し合い、最終的に「理想の共生のかたち」を発表した。私は東部二村洞に居住する日本人にインタビューをして、気になったことがあった。それは日本人と韓国人の間にトラブルがないということだった。交番によると、東部二村洞に住んでいる住民は上流層が多く、日本人はトラブルを起こすのが好きではないからだと言っていたが、新大久保も果たしてそうだろうかという疑問があった。そして、8月4日に新大久保で、パディ同士でより詳しいインタビュー調査を行い分かったことがあった。新大久保に長い間住んでいる韓国人は、日本文化に慣れたため、トラブルや生活の問題は起きにくい、日本に来たばかりの外国人は、言語や文化適応などの問題があるということだった。それが分かり、私たちは日本に来たばかりの外国人が経験している問題を中心にして解決策を考えるべきだと考えることにした。そこで、私たちはその問題を、言語の壁、コミュニティの欠如、外国人を避けようとする態度の3つにまとめた。そして、最終的に私たちが考える理想的な共生の姿にたどり着いた。セミナーで学んだことはこれだけではなく、言語的な面もあった。私は第2次発表と1班の出し物の司会を担当したが、これは私の日本語の実力をチェックする機会になっただけでなく、日本語で喋る際の恐怖心をなくすものになった。このような学習の面でも習ったことが多く本当に良かったが、私にとってより大事なものは、日本人の友達と一緒に過ごせた時間だ。私たちには言語の壁があり辞書を引いて意味を伝えあった。また、生活の中には日本と韓国の文化的・慣習的な違いが多く、それを発見していくのも楽しかった。夜遅くまで歴史の問題について話し合った日もあるし、日本の童謡と韓国の童謡をかわるがわる歌ったり、日本のゲームと韓国のゲームを互いに教えながら一緒にゲームをしたりして過ごした日もあった。その時知った日本のゲームを韓国の友達にも教えたいと思う。また、私たちは日本人には韓国の名前を、韓国人には日本の名前を付けた。漢字の意味とその人のイメージに合わせて付けた名前だからさらに特別な感じがした。まだ日本の文化を全部理解するのは難しいが、私たちがこれほど楽しい時間を過ごすのできるのだから、きっといつか韓国と日本が友好的な関係を築けると感じた。はじめて日本へ行った私に、日本人の友人が親切にいろんなものを紹介してくれて、いろんな所へ案内してくれて本当にありがたいと思った。私も今後、日本の学生たちが韓国に来た時には、きょうまく韓国を紹介して、楽しい時間にしてあげたい。あつという間だったセミナーを通して学んだことも感じたこともたくさんあったが、1つ物足りない点は、発表や質疑応答の時間に韓国の学生たちは消極的だったということだ。これはおそらく、言語の問題だと思う。私も話したいことが多かったが、日本語で話すには少し自信がなく、話したいことを全部伝えることはできなかった。これが解決されたらもっと活発な議論ができるかもしれない。

私が今回のセミナーに参加しようと思ったのは、私にこのような機会はありませんかと思っただからだ。日本の大学生の前で日本語で発表したこと、そして一緒に日韓問題について議論したこと、6泊7日間日本の学生たちと合宿して友達になったこと。これらはただの旅では経験できないことだった。特に、お互いの国について話し合うこと、そして、文化的な違いを実際に経験しながら学ぶことはとても新鮮でかけがえのない経験になった。

異文化を理解すること

10 日間の長いようで短いセミナーが終わった。私にとっては、国際交流はもちろん、海外でのセミナーは初めての経験だったので、新鮮で、楽しくそして、色々と勉強になる時間だった。

日本についた後の二日目、私たちは他の班よりも先に日本側の皆に会った。お互いのことを紹介し、挨拶をする時間を持った。日本側の皆とは会ったばかりとは思えないほど、すぐに仲良くなり、皆私たちに親切にしてくれた。特に自由時間に浅草や明治神宮などの名所に連れていってくれたお陰で、韓国から来た私たちは日本の伝統的な文化を存分に味わうことができた。とても実りの多い時間を過ごすことができた。

セミナーの三日目と六日目には、日本側と韓国側が準備した第1次、第2次発表をした。第1次発表のために、私たちは韓国最大のジャパニーズタウンを調査した。調査する前には韓国に日本人の街があるということを知らなかったが、調査を経て、ジャパニーズタウンは仕事で韓国に派遣される人々によって生まれたのだということがわかった。ほとんどの人が短期間しか韓国にいないというのが実情だったが、彼らは自分の子供が韓国文化に適応出来るようにするため、日々の生活の中で子供に韓国の文化を教えていた。

そして、第2次発表の準備のため、私たちはコリアンタウンの新大久保へ赴いた。驚いたのは、コリアンタウンに住んでいる韓国人のほとんどが飲食店経営などの商業目的で暮らしており、韓国のジャパニーズタウンとは性格が違うということだった。また、韓国に比べて文化の違いによるトラブル、つまり騒音やごみの問題などが多いということがわかった。二つの発表を終えて、異なる文化的背景を持つ人々が共生できる理想的な町を作るには、お互いに対する理解と、学びあうことが必要だと知ることができた。

日本の皆という時間が増えるほど、私は、自分の日本語に間違いが沢山あるということがわかった。例えば、「いる」と「ある」の使い分けや語尾の使い方などが私にとって最も苦手な分野だということを確認することができた。また、私は自分が日本人や日本文化に対しどれだけ固定観念を持っていたのかを強く自覚した。「日本人は固い」、「心を開かない」など、私が持っていたステレオタイプなイメージは日本の友達に出会った後、きれいに消えてしまった。自分が気づいていない内に、私は自ら異文化に対し、壁を作っていた。そして、その国の人に対する理解やその国の人々との直接の交流こそ、その壁を壊す手段なのだと気づいた。

セミナーに参加する前、私は漠然と他の国の人と話したい、そして他文化を知りたいという気持ちを持っていた。そして実際日本に行き、セミナーを通して私が得たのは異文化の経験、そして他の国の人との交流も勿論あるが、異文化をどのように理解すればいいのか、そして他の国の人とどのように接していけばいいのかを学ぶこともできた。特にこのセミナーは同年代の大学生が集まり、日韓両国の大学生の考えや進路を知ることができ、さらに親密な関係を築くことができた点でよかったと思う。私はこのセミナーを通じて、グローバルな社会を生き抜くにふさわしい人はどうあるべきか、さらにそういう人になるためにはどんな努力が必要なのかを思い知り、またとない貴重な経験をしたと思う。

セミナーを通じた学び

これまで私が知っていた日本人は本で読み、学校で授業時間に習った内容が全部でした。日本人とこのように長い時間を共にしたことが初めてであったため毎日、いろいろな活動をして驚いたことが多かったです。今回のセミナーを通じて私が日本に対して持っていた偏見などを変化させることができる機会になりました。日本は韓国と似ている点が多いだろうと思ったが、地理的、文化的、歴史的な違いのために思ったより多くの点が違いました。そして日本の中でもいくつかの地域から来た友達が多く、その地域によってそれに個人的な成長背景によっても性格が全く異なるため、「日本人は～する」と断定するのがとても危険だと考えるようになりました。

私は韓服と着物を説明する役割を担うことになりましたが、発表の前日、お互いに準備してきた翻訳本を添削してくれたり、どのように進行するかについて、リハーサルをやってみて、言葉だけでなく文化的にも多くのことを学ぶことができました。韓服と着物をいつ着るのかどれくらい頻繁に着るのか来て基本的な歴史を説明したりもし、未明まで継続される準備にも難しいという考え方より面白くて興味深いという考えをしました。また、基本的に今回の交流で会った友人たちは韓国と国際交流に関心がある友達だったために韓国にいったことがあるか、韓国語を習いたがっているお友達が多くて早く親しくなることができました。日本語が不足した私の話を、すまない位、よく聞いて日本語を勉強しながらよく理解できない部分を私が理解できるまで詳しく説明してくれる姿を見て、とてもありがとうございました。言語が完璧でなくても、相手の心を感じることができるということを知るようになりました。うちの組は、東部二村洞と新大久保で韓国人と日本人の生活や韓国人と日本人の共生について発表しました。韓国で東部二村洞について調査する時は韓国で日本人が最も多く暮らしているところである東部二村洞、日本のコリアタウンで最も有名な新大久保は同じだろうと思いました。しかし、新大久保の調査を終えた後、二つの町がとても違うということを知りました。第2次発表する時には新大久保を調査に行って新大久保に住む韓国人たちと不動産などを訪ねてインタビューをして、韓国へ交換学生に行った日本人の意見を参考にしました。発表準備をしながら日本に住んでる人の不便な点や韓国に住んでいる日本人の不便な点を見ながら、それぞれ国が直さなければいけない点を知るようになりました。新大久保の調査後、日本人であるため、当たり前だったことが外国人には難しく、不便な点などを分かるようになりました。私たちはこうした様々な問題を解決するいくつかの方法と、すでに存在しているが、人々がよく分からないでいるプログラムを探してみるなど日韓の共生に向けて、私たちが志向しなければならない方向について考えてみました。

セミナーを演じながら驚いた点は全体的な構成が本当によく組まれているということでした。数回のセミナーを通じて補完が多くなっただろうと思います。セミナーだけでなく、お互いに仲良くなれますようにゲームをしたり、韓服と着物を着てみたり、送別会の準備をしながらさらに身近になってお互いの文化を交流することが可能だった経験をできて良かったです。また、スケジュールが適切に分配されていてたくさん大変ではありませんでした。今回のセミナーを通じて私は大事な友達と付き合うことができ、日韓がどう進むべきか具体的に考えて見られるようになりました。また、日本人に対する偏見をなくすることができる、日本の文化を学べるチャンスになりました。

大事な経験

私は2班のメンバーとして参加しました。2班のテーマは歴史で、韓日両国と関連した歴史を調査しました。そのような調査をする中で最も良かったのは、韓国人である私でさえもあまり知らなかった、詳しい内容を知ることができた点です。特に第1次の発表準備の際、安重根義士に対して多くの調査をしました。その時私は、歴史と安重根義士に対して知っていることがあまり多くなかったのだと感じました。また、日本側の発表を聞きながら、日本人たちが両国の歴史についてどう思っているのか知れたことも良かったです。

第2次発表の準備の時は、両国の教科書を比較して見ることでよかったです。特に、韓国では見ることができなかった日本の中高校教科書を見ることができて嬉しかったです。

一週間の交流は本当に短い期間でしたが、それでも、言語的学びが最も大きな学びになりました。実際に私が日本に滞在をしたり日本人たちと交流をすると、どの程度のレベルで言語疎通ができるのかという自分に対する評価を下すことができます。また、授業時間に使用する日本語ではなく、日常的な対話をしながら日本語を勉強することに対する関心もより高くなりました。日本側の学生たちがやさしい日本語で言ってくれた時は確かに聞き取れましたが、日本人同士の会話などは依然として聞き取れないことが多くて、まだ日本語力が大いに不足していることも実感しました。

また、交流をする前は、日本は韓国と似ているが違う点も多いと聞いていましたが、実際は何がどう違うか全然分かっていませんでした。しかし交流をする中で、文化的に違うというのはどういうことなのかに気付くことができました。もっと知りたいことも生まれました。例えば、日本人が「大丈夫」と言った場合、日本人たちは本当に大丈夫なのか、それとも大丈夫だと言っているだけなのか、ということが気になります。これからももっと交流をして、研究してみたいと思いました。

セミナーを通じて、漠然としています。日本と日本語をもっと深く理解するための糸口を見つけられたような気がします。確かにセミナーは、団体生活の厳しさや外国語によって正確な意思疎通ができないこと、慣れない場所での生活など難しい点も多く、さらに暑さもあり、大変でした。しかし日本の友達と別れる時は、涙が流れるほど、とても残念でした。特に、帰国して気を取り直して、日常へもどっていった時、セミナーの経験が日本語と日本を勉強することについて役立っただけでなく、私の人生全体にプラスになるほど大切な経験だということに気付きました。また日本の友達に会いたいです。

韓国人同士が最後の2泊3日ほど滞在したユースホステルは本当に良かったです。日本の友達たちと過ごした宿舎はとても残念でした。もっときれいで便利な宿舎があったなら、120%幸せなセミナーだったと思います。

ユンギョンの特別な夏休み

私は日本人の友達と交流がしたくて、第11回韓日大学生国際セミナーに参加した。4月からテレビ会議で、日本人の友達と交流を始めた。私たちのグループのテーマは、「歴史」であった。最初は歴史についてどのように発表をすればよいのか心配だった。私たちのグループは「韓日両国の歴史認識と問題」を第1次発表のテーマに決めた。今回のセミナーの発表準備をしながら、今後発表をするときに十分な時間を準備しなければならないと感じた。私たちのグループは、簡単に日本のイメージや歴史認識を調べるため、周囲の人たちにアンケート調査を行った。若い世代は、グローバル時代であるだけに、東アジアの平和のために関係が改善されることを望んでいることがわかった。今回のセミナーがなかったら考えもしなかったようなテーマをメンバーたちと話しながら、韓国と日本の関係について関心を持つようになった。また、安重根義士の伊藤博文初代統監狙撃事件についても発表をした。発表の準備をしながら、自分の歴史に対する知識の無さを感じた。第2次発表は、日本人の友達と一緒に準備した。大きなテーマは、両国の教科書比較であった。実際に、私たちが中学・高校時代に学んだ教科書を比較してみると、両国の間で歴史を異なった見方で認識していることを感じた。日本人の友達は優しく、たくさん気遣ってくれた。私の日本語はあまり上手ではなかったのに、翻訳機で意味を教えてくれて理解することができた。この機会を通じて、日本語をもっと上手になりたいと思うようになった。次に日本人の友達が韓国に遊びに来たらぜひ日本語でガイドをしてあげたい。文化の違いはお風呂に入るときに感じた。韓国ではお風呂に入るとき歯磨きと洗顔もその場で済ませてしまうが、日本のお風呂は本当に入浴だけで歯磨きと洗顔は外にある洗面台であることを知った。そして日本人の友達は私たちよりも体力があるようだ。日本人の友達が朝7時になるとちゃんと起きて顔を洗い朝ごはんを食べる姿を見ながら、その真面目さを感じ、怠けがちな自分の姿を反省した。一週間一緒に生活したことで、相違点と同時に共通点も感じた。私たちは皆、食べるのが好きということだ。10日間、導いてくださった2人の先生方にも感謝の意を表したい。森山先生は性格も韓国人のようなどころがある。短い時間だったが、多くのことを感じ学ぶことができた。このような素晴らしい機会を設けてくださった全ての方々に感謝の気持ちでいっぱいである。

国家を越えて

テーマについて研究・討論・発表した内容から学んだこと

我らの2班（歴史組）の1次の発表は「両国国民が持っているお互いに対するイメージ調査」と「安重根」という人物を調査して発表し、日本側と共に発表した第2次の発表では、両国が抱える問題を乗り越えて共生する方法を探しました。以前から問題とされていた「歴史教科書」をもとに、韓日両国が実際に使用する歴史教科書を比較して分析し、今後、両国が進むべき方向を相談し合って探してみました。

調査内容を「慰安婦」、「強制徴用（在日韓国人）」、「今後進むべき未来」の3つに絞り、実際に港区にある「在日韓国人歴史資料館」に訪れ、そこで慰安婦女性の話や在日韓国人の生活の資料を見つけ資料の分析をすることができました。また、お茶大生たちが聞いた韓日両国の歴史教科書問題に関する講演を元に、今後の韓日両国の歴史教科書問題の解決策のための1つの道を発見することができました。それは韓日中共同歴史教科書、つまり「東アジアで」教科書を編纂することです。

韓日両国の未来の話をお互いにながら感じたことは、両国国民が、和合や韓日で1つになること、真の交流を望んでいるということです。歴史を忘れてはなりません、それを越えて未来を作っていくための1つの羅針盤として過去を見なければならぬ、ということを感じました。

交流を通じて得た言語的、文化的学び

今回のセミナーを通じて最も大きく感じた文化的な違いは韓国の友人は自分の意見をすぐによく言って表現しますが、日本人の友達は相手を配慮して自分の意見より相手の意見を聞こうとする、といった態度の違いです。どちらがより正しいとも言え切れず両方長所と短所があると思います。そのため、韓国人は配慮する日本側の友人を見ながらもう少し配慮することが必要であると感じ、日本側の友人はもっと自分の意思を表現して積極的になることが必要であると感じました。友人の姿を長所と受け止めながら、互いに文化の違いを理解して知っていくきっかけになりました。

セミナー全般についての評価

まず心を開き、一緒に活動してくれた日本側のお茶大の友人に感謝の言葉を伝えます。今回のセミナーは、おそらく私の人生で忘れられない、非常に大切な思い出になるでしょう。国家の概念だけでなく見つめてきた問題を乗り越えて、私は更に広い視野で眺められるようになったようです。また、両国のよい先生たちと一緒にセミナーに参加することができて本当に良かったです。旅行で得られないそれ以上の何かを得ました。今後とも可能ならば私も韓日両国間の関係改善のために最善を尽くしたいです。いい機会と思い出を作ってください感謝いたします。

忘れられない夏

私は今回の韓日交流セミナーを通じて多くのことを知った。普段の学校生活の中よりも、協同、歴史、文化、などを頭の中、心の中で深く悟り、学んだ。私は歴史テーマを担当した。私は今まで歴史についての知識はあまりなく、歴史に関心のない他の人たちと同じだった。しかし今回のセミナーは日本の友達と一緒にするセミナーだったため、特に歴史のグループに関心があった。それで歴史グループを選択した。準備を進める中で知らなかった深い歴史について学び、韓日歴史認識調査をしてみて気付いたこともあった。私は、安重根義士が有名であり、すごい仕事をしてきた偉人として代表的であることを知っている。今回のセミナーは、歴史資料を調査し、まとめ、安重根義士が伊藤博文を殺した正確な理由と、安重根義士は日本人が考えているようなテロリストではないということを韓国人の私が説明できる良い機会になったと思う。また、私が初めて日本の友達と交流する機会にもなった。バスの中や宿舎の中でも日本の友達と共に過ごし、第2次の発表も一緒に準備したが、大きい困難がなかった。日本の立場で日本人の友達の考えを聞くことができたし、国は違ったが意見がよくあった。そして元々、日本人が親切なのは知っていたが、直接日本人と親しくしてみると、本当に配慮が多く、繊細で勤勉な友達だった。また、日本の友達と一緒に風呂に入ったら、入浴文化も少しずつ違うことが分かった。韓国人は、風呂場で髪や体を洗うときに歯も一緒に磨き、それからお湯につかり、湯から出てきた後も洗う。日本人の友達は私たちのそんな姿に驚いた。日本では、一度湯船に浸かったら風呂場でのすべての作業が終わる。このような文化の違いが面白かった。多くのことを知ることのできた期間だった。

今回のセミナーには初めて参加したが、良い雰囲気の中で友達とすぐに親しくなり、日本の友達が韓国の私たちを温かく迎えてくれて本当に助かった。また、アシスタントの方が本当に親切だったので、積極的に近づき、質問を行うことができた。そして森山先生は韓国人のよう、金晳泳教授は日本人のようで何だか新鮮だった。日本人の友達も感じたと同じくらい私もそう感じた。

ただ、残念だったこともある。私は、セミナーのテーマに沿った活動の時間より自由時間の方が多いと感じた。今回のセミナーが始まる前、セミナー中の自由時間がこんなに多いとは知らなかった。あらかじめ自由時間の日程を公開していただければ計画を立てられたのに、気付かなくて残念だった。お金は余裕のあるように持っていったのでまだよかった。自由時間が多いことは他の人にとっては良い点かも知れないが、私はその点が少し残念だった。

セミナー期間中、ありがとうございました。

多くのことを学んだ夏

セミナーに参加し日本に行く前にいろいろなことがあって心配していました。しかし、テーマが決まった後は話がよく進み、積極的に意見を話して私ももっと熱心に参加しようと思いました。会って話すのではなくて日本語でLINEを使って連絡するのが大変でしたが韓国にいるうちにも日本語を使ういい経験になりました。テレビ会議は非常に楽しかったです。

間接交流を通じて韓日関係の改善方法を考えました。まずアンケートを行い、韓国の人々が日本についてどう考えているかを調べました。アンケートの結果を見ると、韓国の人と日本人の認識が違うことが分かりました。

アンケートの結果をもとに第2次発表を準備する中で難しい問題がありましたが、みんなが自分の立場で理解しようと努力してくれました。本当にありがたく思っています。みんなで話し合う時、韓国語での私の考えを日本語で話すことが難しかったです。また直接交流ではなく間接交流で韓日の人々がお互いを理解できる方法を探することも難しかったです。直接会って話すとお互いをもっと理解しやすいけれど、メディアでお互いを理解するのは難しいと思いました。でも文化の力は大きいと思い、理解できる方法を話し合ってみました。難しく大変なことでもゆっくり話し合うとお互いを理解できることが分かりました。発表の準備をして、また発表を聞いて多くのことを学びました。

ひとつのテーマで韓国と日本の両方の考えと発表を一緒に聞いて考える時間はよかったです。両国の立場を理解できるし、ほかの分野の知識も得ることができて有益でした。

お茶の水大学の人々に会う前には、一週間上手に話せるかなと不安で緊張しました。でもみんながとても優しく安心しました。一週間日本の友達と話すために一日中日本語で考え、話している中で知らない言葉を辞書で調べ、間違えた日本語は友達が直してくれることで勉強になりました。

日本語で会話するのが上手にできず怖かったですが、今回のセミナーで少し自信も付きました。そして私の日本語の実力がまだ足りない事も感じました。日本語の勉強をもっと熱心にしようと思っています。

大変な場合でも文句を言わずみんな積極的にほかの人を手伝っているのを見て、私の態度を反省しました。電車に乗る時も先に行って調べてくれたし小さなことからすべて配慮してくれました。そんな姿を見て私も友達みたいな人になりたいと思いました。

セミナーは施設はあまり良くなかったと思いますが、これを忘れるほど一緒に一週間で過ごすことはとてもいい思い出になりました。バディの友だちがかわいい浴衣を持って来て伝統の衣装を着る体験も楽しかったです。発表の準備は少し難しかったです。でもいいところを探して連れて行ってくれたし、同じ部屋で生活することも楽しい経験になりました。

韓日セミナー

今回のセミナーはいろいろなものを考えるきっかけになりました。セミナーの内容については韓国側は日本側を、日本側は韓国側を理解するきっかけになったと思います。特に私の班は両国の関係を文化的な面から接近することで、その認識についてわかることができました。私以外の韓国人がどんな考え方をしているのか直接調べて大切な経験になって嬉しいです。また日本人についてのいろいろな誤解が理解と変わりました。文化の内面にも歴史的な面があったので、それを発表の準備とかいろいろな話をしながらなぜそんな考え方をしていることになったのかを少し理解しました。また日本人が直接話す日本は面白い面が多かったです。特に食べ物を食べる時、外国人と日本人が知っているおいしい店が違ったので、たくさんおいしい店に行ったこととか、知らないものについて説明してくれたことが本当によかったです。韓国内では塾以外はなかなか日本人と話す機会がありません。日本語の専攻を持っている私にも機会があまりないと思います。その点から見ると、今回のセミナーは4日ずっと日本語を話すので学問的な部分から見てもいいものでした。最初の時は日本語を一日中話すのが本当に心配でした。もちろんテレビ会議の短い時間もとても緊張していました。しかし、日本人の友達と直接話すとだんだん緊張感なくなったし、会話の実力が上がりました。文字を見て勉強することではできなかった若者の言葉もわかったし、日本人が使う日本人らしい表現もわかりました。セミナーは日本語でしたので準備過程がちょっと大変でしたが、今までの時間がそのまま価値的になりました。ですが、これはちょっと…と思ったものがいくつかありました。一番目の宿所でアリと一緒に寝たことと、二番目の宿所でお風呂が四つしかなかったことです。女の子はベットよりお風呂の方がもっと重要なのでその部分は大変でした。宿所以外はいいものとして全部記憶に長く残ると思います。

セミナーをふりかえって

3班のテーマは、間接的な文化を通じた韓日関係の改善であった。韓日両国は、お互いの映画やドラマといったメディアを介して影響を与え、そして受けている。メディアを通じた韓日交流は、簡単に情報を得ることができる利点もあるが、メディアがどのように表現するのかによって、お互いのイメージが歪曲することもあるという致命的な欠点もある。そして、メディアを通じた間接的な交流も直接的な交流のように、韓日両国の政治問題の影響を受ける。韓日両国が民間交流を通じて、韓日関係を改善しても、政治家の発言によって交流に問題が生じる場合が多い。このような限界を克服し、韓日両国の良い関係を維持するために、お互いの立場の違いを知ることが重要である。実習を通してお互いの立場の違いについての理解が異なっていることを感じた。これらの意見の相違を減らすことは、たくさんの時間がかかると思う。しかし、交流を維持すれば韓日関係に良い影響があると考えている。東アジアで韓国と日本の影響は大きいと、協力することが重要である。メディアに反映される韓日両国のイメージを、客観的に考えることが重要である。今回のセミナーに参加しながら、初めて日本に行った。他の国の学生と長い時間を一緒に生活するという事は、初めての経験だった。日本の学生と一緒に生活しながら、彼らの文化について知るために良い経験だった。日本語実力が不足して多くの話ができず、たくさん惜しかった。今回のセミナーを通じて、韓国と日本の関係について多くのことを考えることができた。日本の学生が韓国に対してどのように考えているかどうかを直接聞くことがあって良い時間だった。韓国の音楽や歌手に興味を持っている学生が多く、韓国に対してより関心を持っていることを知った。このように、文化は国のイメージに大きな影響を与える。音楽、ドラマ、映画などの文化を通してその国に興味を持つようになり、その国の言語を学び、文化を学ぶことも良い経験だが、実際にはその国の人と会って話をすることが相手国を理解するのに大きな助けになると考えた。その意味で、このようなセミナーの存在は重要である。韓国と日本の学生が同じテーマを持って議論することも意味があったし、自由な時間を使って日本の観光地に行くことも良い経験だった。日本の学生がとても親切だったので一緒にいた時間が大事であった。他のチームの日本の友達とも挨拶をして話をすることができて良かったし、フェイスブックを通じて日本のニュースを知れるのはとても嬉しい。日本の友達が韓国に来れば必ず韓国を紹介したい。韓国と日本は近いので、このような機会が来ると思っている。日本語上手ではなく残念だった。しかし、次に日本の友達が韓国に来た時は日本語の実力をあげて、多くの話をしたいと思う。十日間、日本語を主に聞いたので聞き取れなかった言葉も多かったが、知っている単語が出てきて聞き取れとき嬉しかった。また、日本に行きたくて航空券を探してみた。今回の経験で、日本に一人で行くことができるような自信がついた。夏だから暑い時もあったが、良い時間だったし、良い友達と一緒にいた時間がずっと記憶に残るようだ。韓国と日本の教授がたくさん助けてくださったので、良い時間を過ごすことができました、ありがとうございます。

韓日交流の第一歩

交流という言葉を考えてとき、ほとんどの人が国家的交流を考えがちであるが、交流という言葉は、個人的な交流も含むということ、今回のセミナーを通して学んだ。つまり、交流とは、私たち学生も実践できるとても身近なものであるということだ。私は、今回の発表を準備しながら、今まで知らなかったたくさんの行事があることを知った。そして、同時に、こういった行事をもっと多くの人々に関心を持ってもらうためにどうするべきかを考える必要性を感じた。

交流に参加するうえで、最も障害になることは、国家的問題である。そして、この国家的問題というのは、人々の考えや行動に大きな影響を及ぼすため、両国は、まともな交流を通じて、歴史的問題や領土問題を解決していく必要があるだろう。一方で、私たち国民は、国家的問題と文化的交流は、異なるものとして切り離して考えなければならない。国家的問題は、確かに関心を持たなければならないが、そればかりを考えて文化的交流をしないというのは、あってはならない。

発表に向けての調査で学んだことは、交流を通じた共生の始まりは、基本的に旅行が最も敷居が低く、積極的に行われる可能性があるということである。国家のイメージによってマイナスの考えを持った人でも、観光を目的とした旅行は、お互いの国に対する偏見をなくす契機となるだろう。そして、そこでの経験が周囲の人々にも良い影響を及ぼし得るということも考えられる。また、私たちが出来ることとしては、韓日交流セミナーのような行事に参加した後に、感じた点を SNS に掲載することが挙げられる。自主的に広報することで、友達と一緒に参加するきっかけを増やしていくことが、交流を通じた共生への出発点になるだろう。

交流を通じて得た文化的学びについては、日本人に対する先入観がなくなったということである。例えば、私は、このセミナーに参加する前まで、日本人の発言には建前があるという先入観を持っていた。しかし、実は、日本人は、必ずしもそうではなかった。また、この建前の文化は、韓国人にも共通して、私自身、あまり親しくない人に対して、建前をつかっていたことに気が付いた。

韓国と日本は、大きな歴史認識の違いだけではなく、箸を置く方法や化粧、衣服においても違いがあり、様々な点でお互いの理解が求められているということを感じた。そして、交流するという点において、国対国という思いより人対人の思いが重要であると思った。そして、セミナーの期間、格式ばった単語だけではなく、日本の大学生たちが使用する言葉を学ぶことができ、そして、それは、繰り返し聞くことで、簡単に覚えることができた。

セミナー期間中、韓国人学生と日本人学生が、一つの部屋に生活しながら、同じ言語でコミュニケーションを取ることができたため、言語的交流にとどまらず、情報交換までできた点が良かったように思う。班員たちと一緒に、観光地を視察し、アンケートをし、団結して発表することができたのは、韓日共生に向けた大きな一歩となり、自信にもつながった。元々、韓日交流に参加したかったが、なかなか機会がなかったので、今回のセミナーは、本当に意味のある経験となった。

韓日国際交流セミナー ～「いい感じ」の4班～

今年の夏、日本で開催された8月1日から8月10日まで同徳女子大学校とお茶の水女大
学による韓日交流セミナーに参加しました。まず、セミナーに参加する前に韓国で第1次
発表の準備をしました。私は、韓国と日本が共生するために必要な交流をテーマとする4
班だったので、韓国のメンバーと一緒に韓日間の直接的な交流に関する情報を調べました。
そして韓日間の交流に否定的な影響を及ぼす要因を調べるためにアンケートを行いました。
また、直接的な交流として韓国にある日本大使館で行われたイベントにも行き、文化体験
をしました。第1次発表の準備を通じて、韓日交流を図ることの出来る手段は多かった一
方で、広報が十分できていないことから交流の促進が難しくなっているという現状を知る
ことができました。そして第2次発表の準備では、韓国と日本の言語を互いに学ぶことが
出来る場があること以外にも新たな情報を得ました。特に、浅草で発表に向けて実施した
インタビューでは、ネットで探した情報ではなく直接調査して得た情報だったので大きな
意味がありました。第2次発表の準備は日本のメンバーと共に行き、韓国と日本両方の意
見を反映できたので、長い準備期間ではなかったけれど発表の内容がより濃いものとなっ
たと思います。他のグループの発表も、聞きながら色々なことを学びました。セミナーの
発表を通じて学んだことの中で一番心に残っているものがあります。それは、私たちのグ
ループの発表内容でもありましたが、韓日間の関係に一番大切なことは、小さいことから
改善していくこと、ということです。小さなことの積み重ねが大きな変化につながるとい
うことが分かりました。この他にも得たことが多かったセミナーでした。

セミナーが始まる前は、バディと日本語でうまく会話をするのできるのだろうか、
文化の違いのために誤解が生じてしまったらどうしよう、などの心配をしていました。し
かし、実際に自分のバディや他のメンバーに会ってみて、そのような心配はなくなりました。
つたない日本語ではありましたが、日本のメンバーは私の話をよく聞いてくれ、いつ
も日本語が上手だと褒めてくれて本当に感動しました。また、文化の違いで誤解が生まれ
ることはなく、むしろその違いについて聞きたいことを質問しながら、楽しい思い出を作
ることができました。お互いの文化について、珍しい伝統的な文化を紹介しあったり、ま
た、似たような文化を共有したりして、たくさんのことを学びました。日本のメンバーと
毎日一緒にいたので、日本語でよく分からない単語も一生懸命説明をする努力をし、短い
期間でも日本語が上手になったという実感もありました。

私は、去年の冬に行われたセミナーにも参加しました。その時にも良いバディとたくさ
んの思い出を作りました。しかし、今回のセミナーは冬のセミナーとは少し違いました。
まず、10日間という長期間におよぶセミナーで、バディたちと過ごした期間に共有したこ
とが想像以上に多かったため、4班のメンバーは、家族のような大切な存在となりました。
私にとって、まさに4班は、私たちの合言葉でもある「いい感じ」の班でした。そしてセ
ミナーの準備だけではなく、東京の観光もでき、2倍楽しむことができたので嬉しかったです。
ただ、第2次発表の準備期間が短かったために、準備を始めてから発表まで仕上げ
るのが非常に大変でした。この部分以外はすべて満足できるセミナーでした。また出来た
らもう一度参加したいと思えるほど、私が大学で活動したことの中で一番大切な思い出と
なったのではないかと思います。

直接交流とは

今回のセミナーを通じて言語的、文化的にたくさん学びました。まず、日本人は「ありがとう」とか、「すみません」という言葉をよく言うことが分かりました。例えば、私がドアを開けたり閉めたりした時にも、「ありがとう」と言ったり、誰かを待たせる時には、「お待たせ致しました」と言ったりしてくれました。ちょっとしたことにも、感謝とかすまない気持ちを持つことは私が学ばなければならないと思いました。二番目は日本語が上手ではないのに、相手の言葉を傾聴してくれる態度がいいと思いました。相手の言葉を傾聴しながら、「なるほど」とか、「確かに」という共感の表現をよくしてくれました。そこで友達との対話を続けることができる勇気が生じ、それによってもっと仲良くなったと思います。三番目は日本人がすべてのことについて、積極的に参加する態度が良いと思いました。特に、第2次発表を準備した時に、みんなが積極的に意見を交わしたり、自分の役割に責任を持ち、最善を尽したりする姿が印象的でした。そして、発表の時にも、質問や自分の意見を言うのを恥ずかしがらず、積極的に参加する態度が良いと思いました。四番目は学校では学べなかった若者が頻繁に使う単語とか、表現などを身につけることができ良かったです。最後は、このセミナーを通じて日本人と韓国人は言語、文化が違いますけど、みんな同じ心や感情を持つ人ですから、いつでも親しくなれるのが分かりました。

次は、私がテーマについて学んだことです。私たちのグループは、「韓日の直接交流」というテーマで1. 現在の韓日交流が積極的に行われているのか、2. そうでなければなぜか、3. そのような限界を乗り越えて、私たちはどんな努力ができるのか、この順番どおりに考えてみました。そこで、私たちは日本文化を直接体験してみたり、アンケートやインタビューを実施したりしました。その過程で、私が印象的だったのはアンケートの参加者の89%が、浅草でインタビューに応じた人たちの殆んどが日本との交流をしたいと答えたということでした。しかし、韓国で開催される日本文化、日本で開催される韓国文化に積極的に参加する人は考えたより少ないということも分かりました。その理由としては、政治、歴史問題もあると思いますが、(とくに、韓国では)文化体験に関する広報があまり行われていないからだと思います。また、印象的だったことは、第2次発表の時、セミナーを参加してから、お互いの国について肯定的なイメージが変わった友達が多いということインタビューを通じて分かったことです。このことから、韓国人、日本人が直接に会って、コミュニケーションができるプログラムなどが多くできれば良いと思いました。私は元々「日本」に関心がありました。でも、韓日間の交流については考えてみたことがありませんでした。しかし、今回のセミナーを通じて、韓日間交流に関わった人たちの肯定的な意向を確認してみることができ、私たちができることが何かを悩んだり話し合ったりできて良い機会だったと思います。

次は、セミナー全般についての評価です。まず、私たちが泊まった施設が不便でした。代々木青少年オリンピックセンターの衛生状態が良くなかったし、草津では、冷房施設が動かなくて、不便でした。二つ目は、日本人友達と一緒に泊まる時間ももっと長かったらいいと思います。セミナーの目的が、日韓交流であるだけに、一緒にいる時間ももっと長かったらいいと思います。そして代々木オリンピックセンターでグループ全員が同じ部屋で合宿をできなかったことが心残りです。そして、韓服と浴衣を着てみる体験が良かったと思います。泊まった場所の衛生状態などで不便に感じたことを除いて、セミナーは全般的に良かったと思います。

韓日関係の改善の第一歩

韓国や日本の上の世代は、日韓関係について正反対の立場をとっています。例えば、戦争に関して、被害者と加害者の立場があります。また、まだ解決されていない歴史問題について、両国は対立しています。私もそのような認識がありました。しかし、今回のセミナーは、同じ年頃の女子大生が集まって過去について話して、今後の関係について自由に意見を交わす場所でした。特に、私たちの班は「女性の子育てと仕事の両立」というテーマで、関連する韓国と日本の政策について調査し、問題を解決するための案を探し、議論しました。両国が直面した「女性福祉」に関する問題は、お互いに似たような状況でした。現在、両国が解決すべき問題は、お互いに似ている点もあり、これを解決するための両国の政策からは、お互いに学ぶことができました。したがって、両国が直面している問題を解決して、一緒に未来を歩いていくためには、お互いを理解し、力を合わせて問題を解決する過程が不可欠であると思いました。

日本側の友人が一生懸命作った自由旅行コースは感動的でした。地元の人々だけが知っている美味しいレストランに行ったり、新宿東京都庁からの夜景を見ながら、東京のスポットを説明するなど、日本へ旅行に来た時には全く経験したことないコースで用意してくれて、日本側の友人の多くの配慮を感じることができました。そして草津での時間もユニークな体験となりました。日本の温泉に深い関心がある韓国の若い世代の人ならば、草津に行くことはとても貴重な体験になると思います。最も暑い日に東京を離れ草津の冷たい空気と、ユニークな温泉を経験することは、何よりも格別の記憶に残りました。また、タイトなスケジュールではなく、十分な自由時間が与えられたので、日本側の友人と楽しい時間を過ごすことができました。

このように日本人の友達とペアになって、日常の話から、韓国と日本の政策に関する立場やそれに関するお互いの考えを深く与えながら、日本の名所を旅した時間は貴重な経験となりました。7日という短い期間の間、誰がこのように外国人の友人と一晩深い話をし、思い出を作ることができますか。多分一生できない経験を、このセミナーを通してしたと思います。このような出会いがこれからも続いて、私たちの世代にお互いの誤解を解いて関係を改善していけば、そう遠くない将来に、両国の良好な関係に役立つことができると考えています。

意味深かったセミナー

お茶の水セミナーの事前会議で日本側の友達が決めたテーマを聞いたとき、女性というテーマが本当に気に入った。歴史や文化交流といったテーマも興味深いと思いましたが、いつもよく見かけるテーマと思ったし、女性をテーマにした日本側の5班と一緒にやることにした。二つの女子大学が会って、女性の福祉を調査し、女性がちょっと全部よいすべての女性にとって良い世の中を作るために社会の問題点や解決点を一緒に探した、または、探したいと思った。

第1次発表の時は韓国側と日本側が発表を別にした。私たち5班は韓国企業の女性福祉に関連して現在どんな福祉制度があり、私企業と公企業の女性福祉はいかなる差があるのか、そして、実際に職場生活をしている女性たちにアンケート調査を行った内容を中心に発表した。韓国の場合には私企業より、公企業の方が女性福祉をよく行っていたが、公企業でも多くの福祉が行われていなかった。まず女性福祉に関連した内容は会社がホームページにない会社もあった。これから私が数年後には就職をしなければならないが、このような事実がとても遠く心が痛かった。

実際、職場内で働いている女性たちの意見を詳しく聞いてみたら、その現実をより詳しく知ることができた。福祉制度があるが、上司の顔色が気になって使用しない場合も多く、まず制度を導入していない会社もかなりあった。政府では子供をたくさん産むことを望んで出産奨励政策をとるが、いざ重要な女性福祉は、企業内でまともに行われていない現実が分かってきた。結局、女性は育児と仕事を両立する上で大きな困難を感じているということだ。

第2次の発表は日本の友達と一緒に発表するために一緒に悩んで調査した。第1次発表の時3人で悩んだが、2回目は8人になっているため、内容もより豊かになって深まった。未だに女性が社会で、ある程度、差別されているのは事実だと思う。このような状況で8人の女性が集まって一緒にその問題点を把握して解決点を探していくのがとても面白くて価値のあるセミナーだった。意味のあるテーマだったため、多くのものを得ていくことができた。そして本当にいい友達にも会った。日本の友達と24時間一緒に過ごしながら日本語もたくさん話した。足りない実力だったが、日本の友達はそんな私に配慮して会話を導いてくれた。共に東京の観光地やショッピング通りを旅行しながらいい思い出も作ることができた。

日本の友達は大変だったのに旅行に来た私たちのために様々な観光地を案内してくれて配慮してくれた。それがとても嬉しかった日本友達と一緒にすごした最後の夜には、長期に自慢もした。一緒にダンスを踊ったが、笑いを抑えるために苦労した。とても楽しい毎日だった。お茶の水セミナーを申請する前に多くの悩みがあったが、申請して本当によかった。不足した発表を最後まで頑張ってくれた友達にありがとう。そして最後まで一生懸命に見守っていただいた先生にとっても感謝している。日本の友達とまた会って楽しい思い出を作る日が来たら良いだろう。来年にあるセミナーにも参加したい。

十日間がもたらした変化

私は同徳女子大学の日本語科3年生で、日本で行われていた9泊10日の韓日交流セミナーに参加しました。日本での旅行と日本語の実力を向上させるために申請しましたが、それよりも貴重なものをたくさん実現することができて、良かったです。

最初に、私はジェンダーについて、日本人学生と一緒に研究して発表していました。韓日の女性がどのようにすれば家庭の仕事を両立することができるかどうかの議論で学んだことは、私たちの国が政策的にも意識的にも日本より数歩劣っているという事実です。試行錯誤しても、私一人の力では改善できないという現実がさらに切なかったです。また、森山先生が課題を提示されたによって、さらに特別な議論を行うことができました。その課題のおかげで、韓日の学生が両国の女性の社会進出問題について表面的なアプローチではなく、直接、両国の政策を見つけ比較し、議論することができました。当面の変化は難しいかもしれませんがこのように韓日学生が集まって女性の福祉向上を話したことだけでも、東アジアの女性たちが家庭や社会の中で居場所が生じることに寄与したと考えています。

二番目に議論する過程で、私は日本人の友達が言うことを聞いて、それを韓国語で解釈し、その内容を理解して、再び私の考えを整理して、それをまた日本語で言わなければならないという点が非常に困難でした。時間もかかり、忍耐が必要でしたが、この過程を通じて、私の日本語能力の不足を具体的に知ることができてよかったです。語彙がたくさん不足していたので、韓国に戻ってから熱心に勉強をしようという刺激を受けました。特に日本語の実力が不足している私のために苦勞した韓国のメンバーには申し訳ありませんし、心から感謝します。自分の意見を整理するのも大変なのに、ご協力いただきありがとうございます。簡単な語彙と間違った文法で話してもすべてを理解してくれた親切な日本人の友達にもありがとうございます。

三番目に、私の素直な気持ちでは、日本人は表面的に良い言葉を言っている、実際は悪い言葉や感情を持っているという偏見がありました。常に良い話ばかりして顔をしかめていない、彼らはひたすら良く見えませんでした。しかし、今回の韓日交流セミナーを介して、複数の人の日本の友達と一緒に、食事をとったり寝たりと生活を共にしてみた結果、彼らは飾り的な性格ではなく、思いやりが深い性格であることを学びました。偏見を持っていたのが申し訳なくなるほど、私に親切にしてくれました。本や講義で100回日本を勉強するよりも、1回の直接体験することの重要性を感じました。今後もこのセミナーがずっと開催されて、後輩たちにも良い経験してほしいです。

第四に、セミナーを準備する過程で、事前の日本側との交流が少ないと思いました。セミナーに関する韓国側のお知らせも不足しており、韓国人教授もまた、会議に出席しない場合があり少し不満でした。しかし、日本を実際に訪れてみると、予想以上にセミナーがよく終わることができて嬉しかったです。

未来に一步近づいていく特別な経験

8月に本格的なセミナーが始まるまでに、隔週、月曜日にテレビ会議があった。私はその前後の調整や整理をし、会議が行われる間、すべての班が時間内に準備した内容を伝達することができるようにする役目だった。学生代表という役職も務めていたために日本に行く前、そして続く8月の日程の全般的な部分まで韓国側の学生たちを統率できる能力も必要だった。そのためにテレビ会議がある2日前まで、すべての班の意見を収集し整理し、セミナーの日程と準備物などを韓国語で作成し、各グループの構成員が発表準備を少しでも円滑にできるように助ける役割を担っていた。8月、第1次の発表前にあった開会のスピーチを2個の言語で作成した点も興味深かった。韓国語で作成した草案は思い浮かぶ考えがあるたびに整理したため、大きな困難はなかったが、会話ではあまり使用しない言葉を日本語の文体で書かなければならなかったことが難しかった。スピーチを作成するために工夫した点は今後大きく役立つであろう。野外実習があった日には班のメンバーたちとみんなで一緒に新大久保に訪問した。第1次発表の時に1班が紹介していた食堂を調査し、外国にあるコリアタウンを自ら体験した。日本の中に小さな韓国が存在するという事だけを知っていたが、直接訪問したことは、大いに意義のある時間となった。特に新大久保に対する内容を先に聞いて訪れた点が大きな助けとなった。

第2次発表の時には、すべての班が踏み込んだ内容を扱っており、有益であった。最も記憶に残る内容は1班と3班が発表した内容だった。第1次発表をもとに、新大久保の現地調査をした1班は、さらに外国人が理解しやすい字で表記を行う必要があるという点を指摘していた。外国人が他国に住む中で抱える大きな問題の一つが言語問題である。これを克服するため、英語以外の言語を追加したり、生活関連情報は簡単な漢字で作成することが必要だと言及していたのが印象深かった。実際に、群馬県の文化通訳登録制度や災害時に簡単な日本語や絵などで説明するという方法がある。このような努力が次第に広がっていくこと、そして外国人たちの住民意識の拡大も必要だと考えた。3班は、韓日の未来と文化について発表した。各国にはそれぞれのメディアだけに依存する無関心な人々が存在する。彼らが互いに悪いイメージのみを持っている点を改善する必要があるという部分に共感した。情報が洪水のように流れる現代社会で情報をろ過し、取捨選択する能力を育てることも重要な要素と考えるためだ。これを通じて、文化は歴史や政治問題を次元超えることができる。文化自体がどの国のものなのかに焦点を当てるよりは、共生する中での共同発展を目指して前進することが最も望ましいのではないかと考えた。

今回の機会を通じて、日本の友達と長く話を交わし、共に時間を送ったのは初めてであった。何よりも韓国で日本語を学ぶ時より実生活で使う日本語を話し、直接ぶつかる感じが新しかった。そして今より日本語をもっと上手に話せるように一生懸命勉強しなければならなかったと感じた。文化的な側面でも多くのことを感じた。友達と食堂に行ったとき、班のメンバーの一部の食べ物が先に出てきても何も言わずに先に食べない経験と、小さな行動にも「失礼します」や「すみません」と言葉にする、相手に配慮するという心を学んだ。

セミナーを準備する中で「果して私がセミナーをより良くすることができるか」と考えることが多かった。しかし、10日という時間は思ったよりはるかに早く過ぎて、別れの時はとても寂しかった。セミナーを終えた今は、簡単にはできない経験をすることができ、かけがえのない財産を得た気分である。今回のセミナーに参加できたことは、今後の進路決定においても大きな促進剤となるであろう。

学ぶということ

今回のセミナーに参加してまたいろいろな事を学ぶことができました。

私は実行委員だったので直接的に発表に参加することはできませんでしたが、みんなが準備する内容を初めから最後まで見ることができこのセミナーがもっと大切に感じられました。色んな発表がありましたが、そのなかでも印象に残ったのはまず歴史教科書に関するものでした。日本の教科書には意外と慰安婦とかに関する内容が細かく書いていなかったことについて驚きました。また、彼らがなぜ慰安婦の少女像を消したいと思うのか分かるようになりました。そして教科書を変えることが難しいならば私たちのような若い世代が先に歴史を正しく学んでその精神を日韓みんなに伝えるのが一番の近道ではないかと考えました。

きっとみんなもそうだと思います。今回の交流で一番成長したのは言語だと思います。普段は勉強しても使うことができなかつた言葉などをパディに対して使ったり、発表で質問をするとき応用できたりして本当に嬉しかったです。韓服を着せたり浴衣を着せてもらったりして、服に込められている精神や意味を知る機会にもなって良かったです。またお互いの文化を教えたり社会の情勢について真剣に話したりするのもとても有益な時間でした。今回の日韓セミナーと一緒に寝たりご飯を食べたり、生活を共にして長く深く会話が続けられたことが一番良かったことだったと思います。どれだけ時間があってもずっと一緒にいないとかわすことができない会話もあるからです。1つ残念だったことは泊まるどころの衛生の問題でした。でもこのようではかさえできない会話もあるのでそれなりに楽しむことが出来ました。これからもこういう機会が増えてまた交流していきたいです。そして日韓の関係もより良い方向に進めて欲しいです。私もこれからもっと勉強してそういう世界を作ることに取り組んでいきたいです。

私に多くのものを残してくれた日韓交流セミナー

私は実行委員だったため、今回のセミナーで他のグループのようにテーマを決めて研究や、発表はしなかった。しかし私はセミナーを通じて得たことが多いため、これが決して残念だと思っていない。まず、第1次の発表が始まる前に実行委員の開会のじがあった。これのために、私は70個ぐらいの漢字語を読むことができなければならなかった。実際に日本人々に開会のじをするという事実が私が熱心に単語を覚えることができるように手伝ってくれた。そのとき勉強した単語のお陰で私が使うことができる日本語の単語の幅が拡大された。高校の時、英語の先生に一番たくさん聞いた言葉が単語は私が使わなければ私のものになっていないという言葉だ。私はこの言葉はあまり感じなかったが、今回のセミナーを通じて本当に痛切に感じた。そして、バディと一緒に話す時もう少し一生懸命日本語の勉強をしなければならなかったと思った。一緒にいる時話したい言葉を思い出しても言語能力が不足して話を出せなかったことがあった。文法と単語を今よりもっとたくさん知ったら第1次発表と第2次発表の時、もっとたくさん質問することができたようだ。1年生が国際交流セミナーに参加するのはすこしきついけど、私はセミナー参加を通じて様々な言語的学びを得ることができて良かった。

今回のセミナーでは、各班が「日韓の共生」、「日韓の未来と歴史教育」、「日韓の未来と文化」、「交流の促進での日韓共生」、「育児休職と関連した日韓共通課題解決」というテーマで発表した。この中で一番印象深かったグループは1班だった。第1次発表の時は韓国側が韓国にある日本人村（東部二村洞）を、日本側が日本にあるコリアタウン（新大久保）を調査して発表した。東部二村洞に住んでいる日本人の生活や新大久保に住んでいるの生活を知ることができた。東部二村洞に住んでいる日本人は韓国人と葛藤がなく、疎通もほとんどなかった。一方、新大久保では韓国人と日本人の間の葛藤が存在した。第2次発表の時1班は、葛藤の原因を分析し、これを解決できる実質的な解決策を提示した。私はまだ学校で発表をほとんどしてみたことがないのに1班の発表を見てどんな発表が良い発表なのか分かるようになった。そして1班から5班まで発表を聞きながら日本側が韓国側に配慮してくれている感じを受けた。日本側の立場では韓国側が多く日本語科であることも、最初から最後まで韓国語に通訳してくれた。おかげで私も発表を聞くことができた。バディと対話する時にも単語質問をたくさんした。前に説明してくれた単語を何度も聞いたこともある。そうする時に痲癢を起さなくて説明してくれた。そんな姿に感動を受けた。セミナーの後に、心の中に多くのことが残った。それで次にもセミナーに参加したい。少し残念だったのは実行委員の活動である。私はセミナーの歓迎会、発表、送別会などの司会は、実行委員の役割だと思っていたが、各班が回転で、司会をしていた。各班は発表準備に忙しく働いたはずなのに、司会までやるためには、準備するのがもっと増えて負担だったようだ。次のセミナーの時は、実行委員の役割を少し加えたらいいと思う。自由時間が適切にあって活動も少なくなかったほうが本当に良かったと思う。

直接交流から始まる共生

朴恵仁（お茶の水女子大学）

「日韓・東アジアが共に生きるために」をテーマとする第 11 回目の今年のセミナーに、お茶の水女子大学と同徳女子大学から約 50 名の学生が集まった。参加学生は 1 週間共に生活しながら、日韓が共生する未来のために真剣に話し合った。その内容は、私にとっても大変勉強になるものであり、今年もこのセミナーに参加できたことをとても嬉しく思っている。

今年の日韓セミナーは日本で行われた。しかし、セミナーを準備したのは日本の学生だけではなく、韓国の学生も一緒になってセミナーの全てのイベントを進めた。今回のセミナーは例年より、特に学生が主体になったセミナーだったと思う。今年の日韓セミナーを作り上げたのは、実行委員をはじめ、全ての参加学生である。ここで改めて全ての参加学生に感謝の気持ちを伝えたい。

また、今年も昨年に続き、お茶の水女子大の学生は韓国語を勉強し、韓国語で第 1 次発表を行った。ほとんどの学生が韓国語は初めてであったにもかかわらず、素晴らしい韓国語で発表することができたと思う。そして、韓国語が上手に話せない日本側の学生のために、慣れない日本語で一生懸命コミュニケーションをとってくれた、韓国側の学生にも感謝の気持ちを伝えたい。全ての学生が、文化と言語の壁を乗り越えて、発表・交流してくれた。

第 11 回目になる今年の日韓セミナーは、私にとっては 3 回目の日韓セミナーだった。毎回参加する学生は異なるが、変わらず感じられることは、直接出会って交流することの素晴らしさである。初めて出会った日本人と韓国人が共に過ごす 1 週間は、多くの参加学生の考え方や価値観が変わることのできる大切な時間であると思う。私自身も、学生として日韓セミナーに参加して日本が好きになり、日本に行ってみたいと思うようになった。元々日本や韓国が好きだった人はもちろん、お互いの国に先入観を持っていた人も、セミナーに参加し、直接交流することで、自分の考えを見つめ直す機会になったと思う。

このような経験は、このセミナーのテーマである「共生」のために重要なことであると考える。共生とは、互いに理解し合い、互いの違いを尊重し、共によりよく生きることである。日本の学生と韓国の学生は、それぞれ異なる国で育ち、異なる教育を受け、異なるバックグラウンドを持っている。このような違いを、居心地の悪いものを感じる人もいるかもしれない。しかし、セミナーに参加した日韓の学生は、共に互いの立場に立って考え、互いの違いを尊重し、互いに理解を深めていた。このような姿勢こそが、まさに共生にとって必要なことであり、このセミナーの最も重要な成果である。

セミナーに参加した学生は、日韓合わせて 50 名程度であるが、この経験は毎年引き継がれ、さらに参加学生の周囲の人々にも伝わっていく。これは小さな変化であるかもしれないが、着実に良い日韓関係を作っていくものだと、私は信じている。

約 1 週間の短い経験ではあるが、セミナーでの経験は、参加学生が今後さらにグローバル化していく世界へ旅立つための、大切な土台となるだろう。このセミナーでの経験、そしてこのセミナーでの出会いを、これからも大切にしていって欲しい。

総評

金囁泳（同徳女子大学校）

毎年お茶の水女子大学と同徳女子大学校が協力して開催する「日韓大学生国際交流セミナー」は今年で11回を迎えることになった。このセミナーは日本と韓国の学生たちが集まって両国における歴史・文化・交流など、様々なテーマをもって主体的に話し合い、意義のある共同発表を導いていくという形で行われるものである。長い間行われてきたこのセミナーで、私がいつも参加した学生たちに言っておきたい話があるが、それは他ではなく「学生たちがこの場で集まってくれたその時点でこのセミナーの目的はもう達成したものだ」と話し合おうと思うその姿勢こそに意味があると思う。その故、日本と韓国の未来もう既に私たちの目の前にある」ということである。

実際、同じ国或いは同じ地域の人々同士であってもお互い理解し得る、理解しようと努力をする姿勢を持つことは非常に難しいことである。それが簡単にできるものであれば、私たちは言葉通りに苦労はしないだろう。韓国の国内で毎日のように地域や利権などをめぐって起こっている嫉視反目こそがその証であり、それはどこの国においても大差はないと思う。それだけではない。日本と韓国は、歴史問題・領土問題・中国と北朝鮮と米国の間における安保問題等々をめぐって常に対立してきた。まるで2002年から始まった両国における和解の雰囲気や日本における韓流などは今やまるで幻のようである。時々このような今の状況を冷静に考えてみると、果たして日本と韓国、両国における関係改善は可能なものであるか、共に協力して未来をひらいていく意思は本当にあるのか、私は疑問に思ってしまう場合が少なくない。日本と韓国の関係を憂え、その改善策を常に模索している私さえ確信がなく、まるで先が見えない状況に置かれているのではないかと感じてしまい、何もかも諦めなくなる気持ちになる時もある。

しかし、未来はもう既に私たちの目の前にあると先に言ったように、その解答は既に私の目の前にあったと思う。私のような大人たちが絶望し、偶には諦めなくなるその心を引き締めるようにしてくれる、反省させてくれる答えは正にこのセミナーに参加した私の前にいた学生たちの志にあると確信する。

もちろん、学生たちはこのセミナーと通して決して高い水準の成果或いは素晴らしい学問的な成果を導き出せることはできなかったかも知れない。またありきたりの話を羅列したに過ぎなかったかも知れないし、毎年あまり変わらない話を繰り返したかも知れない。しかし、私はだからこそこのセミナーに意味があると思う。私は必ずしも学問的な水準が高い結果物だけが両国の間に置かれた数多くの問題や反目を解決してくれるとは信じていない。むしろ普通の人々によるありきたり話が返って難しく高尚な理論より効果的である場合が少なくないと感じている。何故なら一般の人々或いは普通の学生たちが考えられる話こそが私たちの共感を引き出せるからである。例えば、このセミナーをもって学生たちは、たくさん話し合っ、お互い決して良いものだけではなくかも知れないが、決して悪いものだけでもないというごく普通の結論に辿り着くことができたのではないかと感じる。つまり、本やメディアによっては決して得られない隣国の生の話を普通の同世代の隣国の人々から聞き、普通に友達になれたという感動或いは喜びの経験こそ、未来に続く両国の関係改善のためのカギになるのではないかと。同じく普通の人であったというごく普通の結論に大きな意味があるのではないかと。

私はこのような素敵なセミナーを企画して下さった日本の関係者の皆さん、また参加してくれた日本の学生たちに総評の場を借りて感謝の気持ちを伝えたい。私を含め、同徳の学生一同は日本の皆さんの温かい気持ちと友情を一生忘れないと思う。また、誰より力を尽くして下さった森山先生にも感謝の意を表したい。

ともに生きるために

森山新（お茶の水女子大学）

第11回となる今回のセミナーのテーマは「日韓、東アジアがともに生きるために」であった。昨年は戦後70年、日韓国交回復50年の節目の年であって、政治では解決できない様々なテーマについて、日韓両国の学生たちが率直に意見を交換しながら共同声明を発表した。今回はその成功を踏まえ、ともに生きるための未来に向けての対話を開始した。

扱われたテーマは「共生のための街づくり」「歴史教育と共通教科書」「日韓の未来と文化」「交流の促進による日韓共生」「日韓共通の課題としての女性の社会進出」であった。対立の原因となっていた過去をいかに克服し、共同の声明を行うかが昨年の大きな課題であったが、今年は、対立という現状を共生へと転換していくにはどうしたらいいかという点について、話し合いが持たれた。事前のテレビ会議システムでの交流と、代々木、草津での合宿を通じて育まれた友情の絆を基盤としながら、日韓両国の学生たちが納得できるような具体的な方案を模索し、提示された最終発表は、教員の我々からしても学ぶべき点が多く、学生たちがこのような対話と協働を続けていくことで、日韓の共生の道は拓かれると確信している。

また、今年は、各イベントの担当を決めるだけでなく、学生代表を日韓双方から立て、進行のほぼ全てを学生の手に乗せた。学生に進行を委ねることで、セミナー自体を自らのものと捉え、その成功を能動的に捉えるきっかけとなる。さらに、国際イベント開催の成功体験は、必ずや将来、国際的な協働作業を行う際の自信となる。実際に行ってみると、学生たちは主体的に動き、工夫を凝らし、独創的かつ学生が目線での有効な運営を実施しており、主導権を学生に委ねるといった選択が正しかったことを痛感した。

さらに昨年に引き続き、日本の学生には第一次発表を韓国語で行ってもらった。これは、ヨーロッパが共生の道を歩むに際し行き着いた、複言語主義(plurilingualism)という理念とも合致するものである。お互いがお互いの言語を学ぶことは、対話のチャンネルを増やし、コミュニケーションを促進するのみならず、自己中心、自文化中心の見方やナショナルアイデンティティを克服して、インターナショナルなアイデンティティ形成につながるというものである。実際に外国語を学ぶことの困難を日本の学生が共有することで、日本語能力が完全とは言えない中、日本語で対話を行う韓国人学生の立場に対する感謝と敬意が生まれ、言葉の壁を両側から崩し、対話していく土台が築かれていったと思う。また学んだ言語を用いながら政治、歴史などの問題を扱うことも、政治や歴史認識に潜む自国中心の視点に気づき、克服することにつながり、国や文化を超えたシティズンシップ(intercultural citizenship)の育成につながったのではないかと確信している。

最近、世界ではテロの多発、ヨーロッパへの移民の流入、英国のEU離脱、アメリカ大統領選へのトランプ候補の台頭など、「ともに生きる」とは逆行するような事件が相次いで発生している。東アジアにおいても、領土・領海の問題、慰安婦の問題などで対立の構図は今も残っている。このような試練を乗り越え未来を担うべき若者が、共生の道を模索し、共同発表を行うことは大きな意味があると言える。

最近、女性リーダーがいたるところで誕生しているが、日韓両国を代表する女子大学の学生が居場所を共有しながら勝ち取った成功体験は、必ずや女性リーダー育成へとつながり、対立多き今日の社会を良き方向へと導いてくれると信じていたい。

最後になったが、本セミナーの成功にご尽力いただいた、同徳女子大学校の日本語学科の金晴泳先生をはじめとした諸先生方、お茶の水女子大学のグローバル文化学環、グローバル教育センターの諸先生方やスタッフの皆さんに心から感謝の意を表したい。

編集後記

日韓大学生国際交流セミナーは今年で 11 回目、昨年度は日韓国交回復 50 周年を迎え、過去を乗り越え、未来を共に歩むための共同声明を発表した。今年はさらに日韓、そして東アジアが共に生きるための熱い議論が交わされた。

この声が近い将来、東アジアの平和と共生として開花することを祈りたい。

日韓、東アジアがともに生きるために

～第 11 回 日韓大学生国際交流セミナー報告書～

発行年月日 2016 年 12 月 20 日

発行 お茶の水女子大学グローバル文化学環・グローバル教育センター

住所 〒112-8610 東京都文京区大塚 2-1-1

電話&FAX 03-5978-5691

<http://www.cf.ocha.ac.jp/gec/>

発行協力 同徳女子大学校外国語学部日本語科

住所 〒134-714 ソウル特別市城北区月谷 23-1

電話 02-940-4370

編集 森山新（お茶の水女子大学）

印刷 よしみ工産



第11回日韓大学生国際交流セミナー